法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-14

『資本論』第3部第1稿のMEGA版について ： MEGA第2部第4巻第2分冊の付属資料を中心に

OTANI, Teinosuke / 大谷, 禎之介

(出版者 / Publisher)
法政大学経済学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
経済志林 / The Hosei University Economic Review
(巻 / Volume)
62
(号 / Number)
2
(開始ページ / Start Page)
245
(終了ページ / End Page)
316
(発行年 / Year)
1994-09-30
(URL)
https://doi.org/10.15002/00008580

Teinosuke Otani: On the MEGA-Edition of Book III of "Capital" of Karl Marx
KEIZAI-SHIRIN (The Hosei University Economic Review), Vol.62, No.2
Hosei University, Tokyo, Japan, 1994

『資本論』第3部第1稿のMEGA版について

——MEGA第2部第4巻第2分冊の付属資料を中心に——

大　谷　禎之介

目　次

はじめに
1.　エンゲルス版の歴史的意義
2.　MEGA版刊行の意義
3.　第3部MEGA版について

資料——MEGA付属資料から——
　解　題
　成立と来歴
　　草稿の執筆時期について
　　補足的な諸研究
　　草稿のそのほかの手入れについて
　　典拠文書についての記録

はじめに

1993年にMEGA第2部第4巻第2分冊が刊行されたが，これには待望の『資本論』第3部第1稿が収められている。本稿では，この分冊に付属資料として収められている「解題」および「成立と来歴」を中心に，こ

の分冊の内容を紹介するとともに，それらについて若干のコメントを述べることにする。筆者は，1994年10月に開催される経済理論学会第42回大会で「『資本論』第3部の百年——エンゲルス版からMEGA版へ——」と題する報告を行なうことになっており，本稿はそのための準備の一部として暫定的にまとめたものである。

はじめに，この『資本論』第3部のMEGA版の意義と内容とを，第3部の現行版の底本となっている1894年刊行のエンゲルス版と対比しながら瞥見し，そのうえで，「解題」および「成立と来歴」について簡単な解説を加えよう。

なお，稿末に資料として，本稿で紹介・論評した「解題」と「成立と来歴」との拙訳を掲げておく。参照されたい。

1. エンゲルス版の歴史的意義

1994年で『資本論』第3部のエンゲルス版が刊行されてから百年が過ぎた。エンゲルスは，マルクスの遺稿のなかに第2部および第3部のための草稿を発見して，まず第2部を編集・刊行したのち，第3部の編集に着手したが，それからこの部の刊行までに，彼は9年以上の歳月を要した。きわめて草稿性の高い未完の原稿を，ともかくもまとまった書物のかたちにまで仕上げるエンゲルスの作業は，エンゲルス自身が彼の多くの手紙のなかで繰り返し述べたように，困難をきわめたものであった。エンゲルスはこの困難な仕事をなんとかやりとげて，1894年に2分冊からなる『資本論』第3巻を刊行し，その翌年に死んだ。

マルクス自身が刊行できなかった第2部および第3部を編集・刊行して，彼の主著の理論的部分を完成させたエンゲルスの功績は，それらがもつ欠陥や不十分さにもかかわらず，不朽のものである。『資本論』の第1部は，「資本の生産過程」の分析によって資本主義的生産様式の最も本質的な諸関係とそれらの物象化とを明らかにしており，「高い程度にそれ自

身として一つの全体をなしている」(MEW, Bd.23, S.39) と言うことができるが，しかしここでの叙述は，そのあとに「第2部　資本の流通過程」と「第3部　総過程の諸形象」が続くことを予定していたのであって，マルクスにとっては，これら全3部が「資本の一般的分析」(MEGA, Ⅱ/4.2, S.305; MEW, Bd.25, S.245)，「資本主義的生産の一般的研究」(MEGA, Ⅱ/4.2, S.215; MEW, Bd.25, S.152) として「一つの芸術的な全体」(MEW, Bd.31, S.132) をなすものだったのである。

リカードウらの古典派経済学者たちもすでに，平均利潤とそれをもたらす価格（生産価格）との存在を知っており，これらと商品価値とのあいだに説明されるべき問題が潜んでいることに気づいていた。また彼らは，利潤，利子，地代を個々に論じるばかりでなく，すでに事実上それらを剰余労働に還元する戸口にまで到達していた。マルクスは『資本論』第1部で，価値を生産価格から独立につかみだして，それが商品生産関係のもとで労働生産物のなかに必然的に対象化した抽象的人間的労働だというその本質とそれの形態とを明らかにし（価値論），生産価格を展開するための確固たる基礎を固めた。彼はまた，この価値論を基礎に，資本の価値増殖の結果である剰余価値が，資本主義的生産関係のもとで資本家の商品のなかに必然的に対象化した賃労働者の剰余労働だというその本質を根底から明らかにした（剰余価値論）。これによって，古典派経済学がなしえなかった，価値からの生産価格の展開も，剰余価値がとるさまざまの形態の展開も可能となったのである。しかし第1部は，この二つの展開を可能にしたが，これらの展開そのものはしていない。つまり，第1部は，生産価格や剰余価値のさまざまの具体的形態という現象形態の奥に潜んでいる本質，つまり価値と剰余価値とを明らかにしたが，この本質から現象形態を展開して，現象形態そのものを説明する課題はまだ果たしていなかったのである。資本の科学的認識は，資本主義的生産様式のもとでの必然的な経済的諸形態（諸範疇）からそこに現象している本質をつかみだし，この本質の認識にもとづいてそれらの諸形態をこの本質の現象諸形態として展開

するところにある。このような観点から見るなら，『資本論』第1部が「一つの全体」をなしているといっても，その「全体」とは，本質についての叙述として完結している，ということであって，資本の認識そのものは，まだまったく完了していないことは明らかである。「資本の一般的分析」ないし「資本主義的生産の一般的研究」は，第1部で明らかにされた価値および剰余価値を基礎にして，それらの必然的な現象諸形態が展開されたときにはじめて完了することができる。『資本論』の外にもろもろの研究が残されているにもかかわらず，マルクスが『資本論』の全3部（第4部の「学説史」を除く理論的部分）をもって「一つの芸術的な全体」と呼んだ最も根底的な理由はここにあったと言うべきであろう[1]。

エンゲルスの最晩年の悪戦苦闘[2]によって，人類は，そしてとりわけ労働者階級は『資本論』の第2部および第3部をもつことができた。かりに，エンゲルスによる第2部および第3部の刊行がなかったとして，これまでに経済学者は，そこで分析され展開されている諸問題をそこでなされているようなしかたで自ら展開し，さらにそれを資本主義的生産の理論的分析に適用することができていたであろうか。資本の循環と回転，固定資本と流動資本，社会的総資本の再生産と流通，平均利潤率と生産価格，商業資本と貨幣取扱資本，利子生み資本と信用制度の諸問題，土地所有と地代，三位一体的定式，等々，――これらをめぐる論争や研究は，ほとんどすべて，エンゲルス版の第2部および第3部での叙述を前提にして行なわれてきたものではなかったか。エンゲルス死後の資本主義的生産の理論的分析とそれをめぐるもろもろの論争との歴史を見ても，かりに『資本論』の第2部および第3部がなかったならば，そのほとんど大部分がまったく異なった様相を呈していたであろうし，多くの場合，そもそもそれ自体が存在しえなかったのではないであろうか。

エンゲルス編の第2部および第3部の欠陥をあげつらうことは，マルクスの草稿がかなりの程度にまで見ることができるようになったいまでは，むしろ手もない仕事だと言うことさえできる。しかしながら，第2部およ

び第3部の編集・刊行というエンゲルスの不朽の業績は，言い換えればエンゲルス版『資本論』第2部および第3部の刊行の歴史的意義は，それらのもつ欠陥や不十分さによってけっして相殺されることはないであろう。エンゲルス版刊行百周年のいま，われわれはあらためて，エンゲルス編の第2部および第3部，とりわけ第3部が，マルクスの「資本の一般的分析」を，本質の分析からさらに現象形態にまで展開することによって，はじめてこれを完成させたことの意義を称揚すべきであろう。

1) エンゲルスは，『資本論』第2部への彼の序文で，すでに刊行された第1部および第2部と彼が編集に着手していた第3部との関係について，四つのことを述べている。

第1に，不変資本と可変資本とへの資本の区別についてである。

この区別は，「経済学の最も複雑な諸問題を解決するための鍵を提供するものであって，これについては，ここでふたたび第2部が――そしてやがて示されるように，なおそれ以上に第3部が――最も適切な証拠になっている。」(MEW, Bd.24, S.24)。

第2は，価値と生産価格との関連についてである。

「実際には，同じ大きさの諸資本は，それらが充用する生きた労働の多少にかかわらず，同じ時間では平均的に同額の利潤を生産するのである。だから，ここには価値法則に反する一つの矛盾がある……。この矛盾をマルクスはすでに『批判』という原稿〔『1861−1863年草稿』〕のなかで解決していた。この解決は，『資本論』のプランによれば，第3部でなされる。……経済学者たちが，価値法則を侵害しないだけではなくむしろそれを基礎としながらどうして均等な平均利潤が形成されうるのか，また形成されざるをえないのか，を論証するならば，そのときにはわれわれはもっと話し合ってみよう。」(MEW, Bd.24, S.26.)

第3は，剰余価値とそれの転化諸形態との関連についてである。

「マルクスの言う剰余価値は，生産手段の所有者が等価なしに取得する価値総額の一般的な形態なのであって，この形態が，マルクスによってはじめて発見されたまったく独特の諸法則に従って，利潤や地代という特殊的な転化した諸形態に分かれるのである。これらの法則は第3部で展開されるのであって，そこではじめて，剰余価値一般の理解から利潤や地代への剰余価値の転化の理解に，したがって資本家階級の内部での剰余価値の

分配の諸法則の理解に到達するためには，どれだけの中間項が必要であるか，が明らかにされるであろう。」(MEW, Bd.24, S.18. 強調はエンゲルス。)

第4は，社会的再生産過程についての叙述の展開についてである。

「この第2部の輝かしい諸研究も，それらがこれまでほとんどだれも踏み込んだことのない領域で到達したまったく新しい諸成果も，ただ第3部の内容への前置きでしかないのであって，この第3部こそは，資本主義的基礎のうえでの社会的再生産過程のマルクスによる叙述の最終の成果を展開するのである。」(MEW, Bd.24, S.26.)

このなかに，『資本論』第3部の編集・刊行を急いでいたエンゲルスがこの部にどのような意義を見ていたかが，はっきりと言い表わされている。このうち，第1と第4とは，第1部および第2部での研究の成果が，第3部での研究の前提および基礎となると同時に，そこでいっそう具体化されるということであるが，第2と第3とは，第1部で把握された本質が第3部で現象形態として展開される，という論点である。第1部と第3部との関係については，後者が決定的に重要である。

マルクスは，第3部第1稿の冒頭のパラグラフで，この部での課題を次のように述べている。

「すでに見たように，全体として考察された生産過程は，生産過程と流通過程との統一である。このことは，流通過程を再生産過程として考察したさいに（第2部第4章）詳しく論じた。この部で問題になるのは，この「統一」についてあれこれと一般的反省を行なうことではありえない。問題はむしろ，資本の過程――全体として考察された――から生じてくる具体的諸形態を見つけだして叙述することである。｛諸資本がそれらの現実的運動のなかで互いに対しあうときの具体的諸形態にとっては，直接的生産過程における資本の姿態〔Gestalt〕も流通過程における資本の姿態〔Gestalt〕も，ただ特殊的契機として現われるだけである。だから，われわれがこの部で展開する資本の諸形象〔Gestaltungen〕は，これらの形象が，社会の表面で，生産当事者たち自身の日常の意識のなかで，そして最後にさまざまの資本の相互にたいする行動である競争のなかで，生じるときの形態に，一歩一歩近づいていくのである。｝」(MEGA, II/4.2, S.7; MEW, Bd.25, S.33.｛　｝は草稿では角括弧である。下線は引用者。)

つまり第3部の課題は，資本の総過程のなかでの資本のもろもろの形象を，すなわち次々と具体的な姿態をとっていく過程を追跡し，そこに現われる具体的諸形態を叙述することなのである。これは，言い換えれば，第1部――第2

部での研究によって補足された――で明らかにされた資本の本質的なもの〔das Wesentliche〕が現象する諸形態を展開することである。そして，この点から見たときに，古典派経済学との対決のなかで第3部で鮮明にされなければならなかった最も肝要な問題が，さきにエンゲルスが述べていた第2，第3の論点であったことは明らかであろう。

『資本論』は，これらの問題の解明を含む「総過程の諸形象」があってはじめて完全なものとなる「資本の一般的分析」として，「一つの芸術的な全体」をなすものなのである。

2) それがまごうかたなき悪戦苦闘の年月であったことは，第3部へのエンゲルスの序文からも読み取ることができるが，それはとりわけ，第3部を編集しつつあった年月にエンゲルスが書き送った多くの手紙のなかで彼自身が記している。その困難は，主として，分量から見ても第3部第1稿の約3分の1を占める第5章から生じたものであった。エンゲルスが第5章でどのような苦労を重ねたかについては，拙稿「「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章）の草稿について（上)」，『経済志林』第51巻第2号，1983年，の「3. エンゲルスの編集作業の経過」を参照されたい。

2. MEGA版刊行の意義

以上のことをはっきり確認したうえで，しかもなおかつわれわれは，第3部のエンゲルス版の刊行からほぼ百年後の1993年にマルクスの第3部第1稿が印刷物として広く公開されたことが，エンゲルスによる第3部の刊行に勝るとも劣らない大きな意義をもつ出来事であることを強調しなければならない。

これまでもすでに，エンゲルス版が，この版だけから想像できるのとはおよそ違った程度にマルクスの草稿とは異なっていること，すなわち，それからはとても想像できないほどにエンゲルスによる手入れが行なわれていること，したがってそれはまさに，それ自身に明記されているように「フリードリヒ・エンゲルス編」として扱われなければならないことが指摘されてきた。そればかりではなく，草稿そのものの内容と，それのエンゲルス版との相違の具体的な内容も，さまざまなかたちで紹介されてき

た。しかしこれまでは，一般には，両者のこのような違いとエンゲルス版の限界とをマルクスの草稿そのものについて確かめることがきわめて困難であった。それが，今回のMEGA版の刊行によって，われわれはマルクスの草稿の内容を，そのありのままにほぼ完全に見ることができるようになったのであり，またこれによって同時に，エンゲルス版がどのようなものであったのかを細部にわたって知ることができるようになったのである。

エンゲルス版と草稿との関係については，とりあえず，次のようなことを指摘できる。

第1に，草稿のうちの多くの部分が，研究過程をそのまま反映した作業ノートの性格をもっており，全体として，草稿はまったく未完成のものであったにもかかわらず，そしてそのことをエンゲルスは彼の序文のなかでありのままに記していたのにもかかわらず，読者は一般にエンゲルス版をつうじて，マルクスの第3部があたかもほぼ完成したものであったかのように受け取ってきた。

第2に，エンゲルス版は，第1部および第2部への引証を，この草稿が執筆されたのちに刊行された第1部と，エンゲルスがのちに編集・刊行した第2部とについて行なっており，マルクスの第3部での叙述が，あたかもこれらの刊本を理論的にも実際にも前提しているかのような外観を与えている。第2部についてとりわけ注意が必要なのは，マルクスが第3部草稿を執筆しはじめたときには，まとまった第2部の草稿はまだまったく書かれておらず，第3部草稿の執筆を中断して，はじめて第2部第1稿が書かれたのだった，という事実である。総じてエンゲルス版は，現行の全3部が，第1部から第3部へと順次に叙述された完成された著作であるかのような外観を与えている。

第3に，エンゲルスは，困難をきわめた編集作業の経緯を詳述した彼の序文にもかかわらず，結果として，彼の版本がマルクスの草稿とそれほど大きな違いがないかのような印象を与えることになった。その最大の原因

は，彼が序文で，草稿と彼の版本のテキストとの関係について，内容にかかわる彼の手入れには彼のものであることを明記した，との趣旨を記しながら，実際には彼はなんの注記もせずに，明らかに内容にかかわるような手入れを，とくに第5章（現行版第5篇）ではいたるところで行なった，というところにある。

第4に，彼の手入れには，さまざまの性格のものがあるが，必ずしも適切ではなかったと思われるものも少なくない。それはとりわけ，彼が最も苦労を重ねた第5章で著しい。草稿では，第3部の本文の一部として意識しつつ書かれた部分のあいだに，本文執筆のための材料を集めたノートの部分が組み込まれており，そこからともかくもまとまった第5章（第5篇）をつくりだすことは容易なことではなかった。エンゲルスが編集を終えるまでに6年もの年月を要した最大の原因は，この第5章の編集の困難であった。彼ははじめ，「すきまを埋めることや暗示されているだけの断片を仕上げることによってこの篇を完全なものにし，この篇が著者の与えようと意図したすべてのものを少なくともおおよそは提供するようにする」努力を尽くしてみたが，それが無理であることを悟り，方針を，「ある程度のところで仕事を切り上げ，現にあるものをできるだけ整理することに限り，どうしても必要な補足だけをする」ことに変更して，編集をなんとかやり終えた（MEW, Bd.25, S.12–13)。そのなかで彼は，一方では，本文の部分と抜萃ノートの部分との境界を見違えて，篇別構成を理解しにくいものにしてしまった。それはとくに，本文では，エンゲルス版第25章の前半に第27章が直接に続くはずのところを，そのあいだに第26章を入れたところに見ることができる。他方で彼は，抜萃ノートを生かすために，この部分からまとまった章をつくりだす努力をし，たとえば「第33章　信用制度のもとでの流通手段」をつくりあげた。マルクスが第5章の本文の一部として，エンゲルス版の第33章のようなものを置く予定をもっていたのかどうか，後述のように，疑問なしとしない。

これらの点だけを考えても，草稿そのものが公刊されたいまでは，エン

ゲルス版は，マルクスの第3部草稿から作成したエンゲルス独自の著作物とみなされるべきものである。MEGA 版[1] が刊行されて，われわれはいまや，第3部については，エンゲルス版と MEGA 版との二つの版をもつことになった。けれども，MEGA 版がアカデミー版，エンゲルス版が普及版として，両者が今後もそれぞれの位置を占めて併用されていくわけでも，そうされるべきでもないであろう。今後は，第3部の版本としては，なによりも MEGA 版が使われるべきであるが，MEGA 版は草稿をそのまま収録したものであって，読みやすいものではけっしてないから，MEGA 版にもとづく新しい普及版が出るまでは，エンゲルス版も利用されることであろう[2]。ただその場合にも，エンゲルス版の性格と限界とがよく理解されたうえで利用されることが望まれる。いずれにせよ，エンゲルス版は遠からずその役割を終えて，歴史的文献として参照されるだけのものとなるであろう。日本について言えば，MEGA 版の邦訳の刊行が先決であろうが，さらに MEGA 版との関係について十分な説明がつけられた独自の普及版の編集も考えられるであろう[3]。

1) 言うまでもなく，MEGA 第2部第4巻第2分冊に収められたのは，第3部草稿の全部ではなくて，そのうちの第1稿，エンゲルスの言う「主要草稿」だけであるから，これを第3部の MEGA 版と呼ぶのは，厳密に言えば正確ではない。しかし，第1稿以外に残されている第3部草稿は，この部の冒頭部分の書き直しである三つの小さな断片だけであって，第1稿が第3部草稿の圧倒的な部分を占めている。そのことを考えれば，今回 MEGA で公刊された第3部草稿を，便宜上，第3部の MEGA 版と呼ぶのは許されないことではないであろう。

2) 第3部 MEGA 版の編集責任者であったマンフレート・ミュラーが，いま，第3部の MEW 版のための仕事をしているとのことである。どのようなものができあがるのか不明であるが，とりあえずはそのようなかたちで，MEGA 版にもとづく普及版が出ることになりそうである。

3) なお，第3部 MEGA 版そのものの邦訳には筆者らがすでに着手しており，いずれ大月書店から刊行される予定である。

3. 第3部MEGA版について

1993年にMEGAの第2部第4巻第2分冊が刊行され，この分冊に，マルクスの第3部用の草稿のうちの圧倒的に最大のものである第1稿[1]が収録された。本稿で，第3部MEGA版と呼んでいるのは，MEGAのこの分冊のことである。

1) 第3部のための残された草稿としては，このほかに，第1部初版刊行（1867年）から第2版刊行（1872年）にいたるまでのどこかの時点で書かれた，第3部の冒頭章のための三つの断稿がある。エンゲルスは，彼が「主要草稿〔Hauptmanuskript〕」と呼んだこの草稿に「Ⅰ」，あとの三つの断稿にそれぞれ「Ⅱ」，「Ⅲ」，「Ⅳ」という番号をつけた。そこで，これらの断稿と区別するために，この草稿は，第1稿とも主要草稿とも呼ばれてきた。のちに訳出する二つの文章では，簡単に「第3部の草稿」と呼ばれている。ドイツ語では，最初に説明が与えられたのちは，定冠詞をつければ，それが第3部第1稿をさすことは明白である。日本語ではそうではないので，第3部第1稿とか第3部主要草稿といった表現がしばしば必要になる。

［刊行年の表示について］

この分冊につけられた刊行年は，実際の刊行の1年前の1992年となっている。これには次のような事情があった。

「現存社会主義」の解体の進行のなかで，それまでMEGAを編集してきたベルリンおよびモスクワの両マルクス＝レーニン主義研究所の存続が危ぶまれるようになったので，アムステルダムの社会史国際研究所（IISG）は，トリーアのカール・マルクス・ハウス（フリードリヒ・エーベルト財団）の協力を得て，MEGAの刊行主体の再編成に尽力した。両マルクス＝レーニン主義研究所でMEGA編集に携わっていた研究者たちの危機感も強かったので，この話は急速に進展して，この4者が完全に対等なかたちで加わる国際マルクス＝エンゲルス財団（IMES）が誕生し，

それ以降，これがMEGAの刊行主体となった。のちに両マルクス＝レーニン主義研究所は事実上ばらばらに解体され，いまでは（1994年2月2日の規約改正によって）IMESの理事会は，IISGからの1名，カール・マルクス・ハウスからの1名，ベルリン・ブランデンブルク科学アカデミーからの1名，MEGA編集グループをかかえるモスクワの研究機関からの共同の代表者1名（社会・民族問題ロシア独立研究所と現代史文書保管・研究ロシアセンターの両研究機関から当面は交替で選出）の4名から構成されている。このIMESにとって最も困難な問題は，編集・刊行のための財源の確保であった。IMESは，MEGAの編集そのものを脱政治化・学術化・国際化して，他の多くの「歴史的・批判的全集」がそうしているように，ヨーロッパのさまざまの学術研究助成を受けることができるように努力してきた。その過程で最も重要であったのは，MEGAの編集作業を行なうさいの指針となる「編集基準」の改訂である。1992年3月に改訂のための国際会議が開催されたのち，IMES編集委員会での作業を経て，1993年初頭に新「編集基準」が公刊されるにいたった[1]。この間に，MEGA事業がドイツ科学アカデミー会議のプロジェクトに採用され，同会議の財政的助成を受けることができるようになっていたが，この助成の条件として，この助成のもとで刊行されるMEGAの諸巻がすべて新しい「編集基準」によって編集されたものであることが義務付けられていた。この助成は1993年から有効になるので，1993年以降に刊行される諸巻はすべて新「編集基準」によって編集されなければならないことになった。ところが，出版社であるディーツ書店の事情などで刊行が遅れていた第1部第20巻と第3部第1稿を収める第2部第4巻第2分冊とは，どちらも旧「編集基準」で編集されたものであったから，ドイツ科学アカデミー会議との関係で，それらはなんとしても1992年のうちに刊行されていなければならなかったのである。そこで，実際にはその刊行が1993年にずれこんでしまった第2部第4巻第2分冊のタイトルページに，1992年と記されることになったわけである。

1) Karl Marx/Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA), herausgegeben von der Internationalen Marx-Engels-Stiftung Amsterdam. Editionsrichtlinien der Marx-Engels-Gesamtausgabe (MEGA). Dietz Verlag Berlin 1993.

[MEGA 第2部第4巻第2分冊の構成]

第2部第4巻第2分冊は，MEGAの他の諸巻と同様に，テキスト〔Text〕の部と付属資料〔Apparat〕の部との2冊から成っている。テキストの部には，編集者による前付のあとに，マルクスの第3部草稿の，最終的に生きている（消されていない）と考えられるテキストが再現されている。付属資料の部には，この草稿について書誌的な記述を行なうべき「成立と来歴〔Entstehung und Überlieferung〕」，「〔異文目録 Variantenverzeichnis〕」，「〔訂正目録 Korrekturenverzeichnis〕」，「〔注解 Erläuterungen〕」，そして文献索引，人名索引，事項索引が収められている。

[「解題」について]

この分冊は，旧「編集基準」によって編集されたもので，新「編集基準」の検討が始められた時期には，すでにテキストの部と付属資料の部の大部分とができあがっていた。しかし，IMESのもとでの学術化・国際化の努力の一環として，この分冊については，本体部分以外の前付等について新基準に合致させる部分的な手入れが行なわれた。

テキストの部につけられた前付のうち，目次や編集上の約束ごとについての記述などを除けば，重要なのはそれへの前置きとなる文章である。これまでMEGA諸巻には，それぞれ「序文〔Einleitung〕」がつけられ，そのなかでは，それぞれの巻に収録されたマルクスおよび／ないしエンゲルスの諸作品について編集者がかなり詳細な解説を行なっていた。その解説のなかには，従来の「マルクス＝レーニン主義」の教条的な枠組みのなかでのイデオロギー的な解釈も含まれていて，「編集基準」の改訂のさい

の一つの問題点とされたのであった。新たな基準についての議論のなかで，このような「前置き」では，収録された諸作品そのものについての客観的な記述にかぎるべきであって，そこに含まれている内容についての政治的背景や政治的・社会的意義についての言及は避けるべきだという点でおおかたの合意が得られた。この第2部第4巻第2分冊については，編集の責任者であるマンフレート・ミュラーによる草案が，すでに1991年初頭には完成しており，それが，同年2月にベルリンで開催された「『資本論』第3部原草稿の，MEGA第2部での刊行の準備のための専門家コロキウム」で検討され，そこでの議論をも踏まえて，さまざまの手が加えられたのちに最終稿が仕上げられた。その原案の段階では，これまでの諸巻と同じく，「序文〔Einleitung〕」となっていたが，印刷されたものでは「解題〔Einführung〕」[1] と変更された。「序文」が「解題」に変更されたのは，新「編集基準」では付属資料の最初に「解題〔Einführung〕」を置くことが規定されているので，これに合わせたものである。しかし，その内容は学術的なものであるが，新「編集基準」にそって書かれたものとは言いがたい[2]。

1) Einführung とは，導入，手引き，入門，案内などの意味であろうが，MEGA のテキストへの前置きとなるものの訳語として，本稿では「解題」という語を選択した。

2) 新「編集基準」では，付属資料の一部として「解題〔Einführung〕」がおかれることになっており，それは次のような内容を含むものとされている。

「必要なかぎりで，一つの巻（または諸巻からなる一グループ）に解題がつけられる。これは次の諸点についての説明を行なうものである。

—その巻の構成，その巻と他の諸巻との境界または連関，その巻の内部の篇別構成，

—資料の採否の諸根拠，

—材料の整理，それらの特有の性格に対応したテキスト批判的な分析，

—テキスト批判の結果として行なわれた編集上の諸決定（たとえば，執筆者の確定，執筆時期の推定，テキストの再現，テキストの修正，異文の記述，その他の編集上の特色）。」（Ebenda, S.30.）

［テキストについて］

テキストは，誤植が散見されるものの，エンゲルス版とは異なる草稿の状態をよく再現している。

とくに注目されるのは，第5章（エンゲルス版第5篇）のうちの「5）信用。架空資本」の取り扱いである。ここは，エンゲルス版で第25章—第35章にあたる部分であって，このテキストでは，大まかに言って，次のような構成になっている。

① まず，「5） 信用。架空資本」という表題に続いて，エンゲルス版第25章の最初のほぼ4分の1がある。これは，MEW版で413ページから417ページの，「特殊な信用諸機関〔草稿では信用諸用具〕ならびに銀行そのもの〔草稿では「そのもの」はない〕の特殊的な諸形態は，われわれの目的のためにはこれ以上考察する必要はない」，というところまでの部分である。

② これに続いて，編集者が「［追補〔Zusätze〕］」というタイトルをつけた，抜萃ノート的な部分がくる。これはエンゲルス版では，第25章の上の①の部分以降の部分（そこには草稿の他の部分からの組み入れもある）と第26章とにあたる。

③ それから，編集者が「［資本主義的生産における信用の役割］」というタイトルをつけた，エンゲルス版第27章にあたる部分がくる。

④ 次に，エンゲルス版第28章の冒頭の1パラグラフのあとに，マルクスが「Ⅰ）」とした部分がくる。これは，エンゲルス版の第28章にあたる。

⑤ 続いて，エンゲルス版の第29章にあたる，マルクスが「Ⅱ）」とした部分がある。

⑥ 次いで，マルクスが「Ⅲ）」とした部分がくるが，ここは，エンゲルス版で第30章および第31章の両章にあたる部分が終るところで，いったん中断されている。

⑦ この中断のあいだに挿入されているのが，「混乱」と題する材

料集録の諸ページである。

⑧「混乱」のあとに，編集者が「Ⅲ） 561ページの続き」というタイトルをつけた，Ⅲ）の続きがきている。これは，エンゲルス版では第32章にあたる。

⑨ このあと，編集者が「混乱。583ページの続き」というタイトルをつけた，材料集録の部分がある。エンゲルスは，このなかから第34章と第35章とを作成したのであった。

見られるように，「5） 信用。架空資本」の部分では，第3部のための本文と本文の執筆に利用するための材料集録の部分とが交互に置かれているのである。いま，材料集録の部分を脇に置いてみるなら，そこには次のような本文のためのテキストが浮かび上がる。すなわち，①エンゲルス版第25章の最初の4分の1の部分，③エンゲルス版第27章にあたる「[資本主義的生産における信用の役割]」，④エンゲルス版第28章にあたる「Ⅰ）」，⑤エンゲルス版第29章にあたる「Ⅱ）」，⑥および⑧エンゲルス版第30−32章にあたる「Ⅲ）」，である。

付言すれば，編集者のこのような取り扱いは，これまで筆者が，第3部第5章についての考証的研究のなかで折に触れて述べた，筆者の「5） 信用。架空資本」の構成についての理解とほぼ一致しているものである。筆者も，この「5)」の本文の部分は，上記の五つであると主張してきた[1]。

1） さしあたり，「「信用と架空資本」（『資本論』第3部第25章）の草稿について（上）」，前出，51−56ページ，を参照されたい。これらの部分のそれぞれの主題の理解については，拙稿「「経済学批判」体系プランと信用論」，『資本論体系』⑥，利子・信用，有斐閣，1985年，272ページ，で簡潔に述べたところを，拙稿「「利子生み資本」（『資本論』第3部第21章）の草稿について」，『経済志林』第56巻第3号，1988年，2−6ページ，でやや詳論した。そこでは筆者は，内容から見て，この五つのうちはじめの二つが「5)」の序論，そのあとの三つが「5)」の本論となっていると述べた。

ただ，「成立と来歴」のなかで編集者は触れていないのであるが，「混乱。583ページの続き」では，その全部のページが上から下まで続けて書かれてい

るのではなくて，エンゲルスが「第35章　貴金属と為替相場」に利用した最後の372−380ページでは，テキストはふたたび上半部のみに書かれているのである。したがって，本文で述べた五つの部分に加えてこの部分を六番目の部分とする余地があることに留意しておきたい。

［「成立と来歴」について］

さて，付属資料の部では，まず「成立と来歴」で，マルクスによって草稿が準備され，執筆され，手入れされた過程が，草稿そのものの諸箇所のほか，さまざまの典拠を挙げて明らかにされている[1]。

言うまでもなく，ここでの記述は，さきに触れたテキストの部の前付にある「解題」での記述と対応しあっており，また内容的に互いに補いあっている。この全体を通じて述べられていることのなかには，執筆順序その他についてのきわめて考証的な推定とともに，第3部の諸対象が『資本論』成立史の全過程のなかでどのように取り扱われていたのか，ということについての一定の判断も示されている。前者については，事実材料の扱いの正否が主要な問題になるだけであるが，後者については，マルクスの経済学研究の全体についての理論的な理解が深くかかわってくるのであって，ここで述べられていることの正否についても，議論の余地が残されていると言わなければならない。たとえば，後者の一例は，この第3部第1稿で実際に到達している全体構想が成立してくる過程についての編集者の判断であって，これは，最も大きく言えば，いわゆる「プラン問題」にかかわるものである。総じて「解題」について言えば，さきに触れたそれの最初の草案（序文）に多くの手が加えられたにもかかわらず，記述の内容は，しばしば明確さを欠き，一部には誤解も含まれているように感じられる。さらに，「成立および来歴」で述べられている考証的判断のなかにも，後述のように，理解に苦しむ誤読が見られる。

それにもかかわらず，ここに訳出した二つの付属資料は，『資本論』第3部のMEGA版を利用するさいの重要な手掛りになるものである。それは，MEGA版がどのように編集されているか，ということについての情

報を与えれくれるだけでなく，収録されている第3部草稿そのものについても興味深い情報を提供している。とりわけ，草稿の諸部分の執筆時期と執筆順序とについての推定がそうであって，ここではじめて述べられた執筆順序についての考証も含まれている。「成立と来歴」での編集者の考証について，興味を引くいくつかの点に触れておこう。

第1に，ここで編集者は，マルクスはこの第3部第1稿を，まず第2章から書き始め，そのあとに第1章を書いた，と推定している。この推定をはじめて行なったのは，1981年に発表された，ヴィゴツキー，ミシケーヴィチ，チェルノフスキー，チェプーレンコの4著者の共同論文「1863−1867年におけるK・マルクスの『資本論』の執筆の時期区分について」[2)]であった。編集者たちが強い確信をもち続けているように見えるこの推定は，たしかに有力で，魅力のあるものである。けれども，その考証の仔細を見ると，意外に大雑把なものであることが見えてくる。ここで編集者が挙げている個々の典拠がすべて事実であったとしても，そこから編集者が行なった推定しかできないのかどうかが問題である。ここでは編集者は，考えられうる他のさまざまな可能性をすべてばっさりと切り捨てて，そのような推定を前面に押しだしているように感じられる。

編集者の依拠する事実にはいくつかのものがあるが，彼らにとって動かしがたい最大の根拠と見えているのは，第2章のページづけの独自性である。そこでははじめ，ページごとにではなくて，4ページからなる全紙ごとに鉛筆で「a」から「l」までのノンブルが打たれたが，のちにあらためてインクでページごとに151−202のページ番号がつけられた，と見られる。このようなページづけは，この部分が，すでにページ番号の確定していたそれ以前の部分に続いて書かれたのではなく，それ以前の部分が書かれるまえに書かれたのであって，それ以前の部分が書かれたのちにそれにあわせてページ番号が与えられた，という推定によって最もよく説明されるように思われる。第2章以前にあるのは，言うまでもなく，第1章である。そこから編集者は，第2章が書かれたのちに第1章が書かれた，と考

えるのである。けれども，第2章がそれ以前にあるものよりもまえに書かれたとしても，そのことは，それ以前にある第1章の全部がこの第2章のあとに書かれたことをただちに意味するものではない。第1章を途中まで書いて，そのあとをひとまず飛ばして第2章を書き，のちにその飛ばした部分を埋めたときに新しいページ番号をつけた，という可能性も十分にあるからである。むしろ，草稿第1章の諸部分を見れば，それらが単純に順次に書かれたものではなく，別の時期に書かれたことも考えられる二つの部分からなっていることがわかる。

また，編集者は，彼らのこの推定を支えるものだとして，第1章と第3章とで使われている二つの紙種，すなわち紙の種類が，第3部第1稿の直前に書かれたと想定されている第1部第6章での紙種と同じだということを挙げているのであるが，これも，述べられているかぎりでは，上の推定と矛盾しない，ということでしかなく，この推定を直接に支える証拠の力はもっていないように思われる。

要するに，第1章と第3章との執筆の順序については，これまでに与えられた事実の全体を包括するシナリオとして，ここでの編集者の推定以外のものが十分に考えられるのであって，この推定は興味深い仮説の提唱として受け止めるべきものであろう[3)]。

第2に，編集者は，マルクスが第3部第1〜3章の執筆中のどこかで，おそらくはこの全部——それらの内部の執筆順序は別として——を書き終えたところで，第3部の執筆を中断して，第2部の第1稿の全3章を書き，それからふたたび第3部第1稿に戻って，第4章以降を書いていった，と推定している。

第2部第1稿の執筆のためのこの中断をはじめて指摘したのも，同じく，1981年の4著者の共同論文であった。この点については，筆者が，第3部の中断箇所についての4著者の推定に誤りがあることを指摘し，中断が生じたと考えられる箇所の上限と下限について独自の推定を行なった。この推定は，4人を含むMEGA編集者たちに受け入れられ，MEGA

第2部第4巻第1分冊（『直接的生産過程の諸結果』，『資本論』第2部第1稿，『価値・価格・利潤』を収録）の付属資料では筆者の推定が全面的に採用されていた。第3部の中断箇所についてのこの第3部第1稿の付属資料での推定も，その延長線上でなされているものである[4]。

第3に，第4章を書き始めたときには，マルクスはまだ，商業資本と利子生み資本とを同じこの第4章で取り扱おうと考えていたが，この章の執筆の途中で，この章では商業資本だけを論じ，利子生み資本については次の第5章で論じることにした，という点である。これについては，筆者がかつてその過程と変更の箇所を考証したが，「成立と来歴」での考証は筆者の考証と一致している[5]。

ただし，この点についての編集者の記述には，およそ理解しがたい奇妙な誤読が含まれている。編集者はこう書いている。

「商人資本の考察と利子生み資本の考察は，プラン草案の第8の項目で計画されていたのとはちがって，一緒になされるのではなく，別個に分けて，つまり第3部の第4章と第5章とでなされた。第2章を書いたときは，マルクスは次のように注記していた。「{けれども，この種の資本」――利子生み資本のことを言っている――「が，商業資本一般がそうであるように，別個に論じられなければならないことは，次の項目でわかるであろう。}」（〔本分冊，〕228ページ。）また第2部の「第1稿」にも，第3部第4章が利子生み資本を扱うだろう，という記述がある（MEGA②第2部第4巻第1分冊，360ページ〔『資本の流通過程』，275ページ〕を見よ）。この第4章の表題のなかの文言の変更は，同じく構想についてのマルクスの熟慮がさらに進んだことを反映している（〔本分冊，〕341ページ2-4行への異文を見よ）。この章は，はじめは，もっぱら利子生み資本を含む予定であった。結局，インクでなされた表題の変更が証明しているように，マルクスは商人資本と利子生み資本とを一つの章で論じようと考えた。この二つの資本形態の順序が変えられたことも注目に価する。けれども，商人

資本の叙述が終りに近づいたときにマルクスは，もう一つの形態も，一つの独立の章を設けてそのなかで論じることを決めた。つまり，277ページで次のように言っているのである。「しかしこの点については，われわれは利子生み資本は次の章ではじめて展開するのだから，あとではじめて論じよう」（〔本分冊，〕391ページ）。最終的な文言を確定した表題のこの変更は鉛筆で行なわれたものなので，それはもしかすると，あとで目を通したときにはじめて行なわれたのかもしれない。」

ここでの記述について，まず指摘しなければならないのは，第2章での記述のなかにある「この種の資本」という部分を「利子生み資本のことを言っている」と説明しているが，これは銀行資本の貨幣取扱資本としての側面について言われているのであって，利子生み資本のことではない，ということである。そしてそのあとに，おそらくはこの誤解とも関連している途方もない誤読が続いている。ここでは，①はじめ第4章は利子生み資本の章として構想され，②それが第4章を書き始めるまえにここで利子生み資本および商業資本を論じることにしたが，③第4章に着手するときに，この章でまず商業資本を論じたあと利子生み資本を論じるように両者の位置を取り替え，さらに④第4章を書いていくなかで，利子生み資本は第5章で独立に論じることにした，と言われている。ところが，ここで引証されている「341ページへの異文」[6]を見れば明らかなように，マルクスは一度として，第4章で，しかも商業資本にさきだって，利子生み資本だけを論じるという構想をもったことはなかったのである[7]。マルクスは，第2部第1稿を書いているときも，第4章に着手するときも，この第4章で商業資本と利子生み資本とを，しかもこの順序で論じることにしていたが，第4章の執筆中に，この章では商業資本だけを論じ，利子生み資本は次の第5章で論じるべく，変更しただけなのである。「解題」および「成立と来歴」での記述の全体を通じて感じさせられることであるが，これらの誤読は，MEGAのこの巻の編集者が，貨幣取扱資本，利子生み資本お

よび信用制度について基本的な理解をも欠いていることを示していないであろうか。

第4に，第5章の「5） 信用。架空資本」のなかに含まれている，材料集録（Materialsammlung）の部分（ここでは「混乱」および「混乱。583ページの続き」の両部分のこと）は，執筆がそれらがいま置かれている箇所にさしかかったときに書かれたものではなくて，この節の本文の執筆とは独立に，本文執筆中のどこかで本文と並行してまとめて作成されたものであって，それがのちにそれぞれいま置かれているところに組み入れられたのだ，ということである。この点については，二つの考証上の典拠が示されているだけであるが，この推定は，この部分での異様なページづけの理由を説明するだけでなく，この「5） 信用。架空資本」の全体の繋がりを理解するうえでも，注目すべきものである。

なお，このような考証には，マルクスの用紙の使い方についての注目が不可欠である。すなわち，マルクスは通常，上半部に本文を書き，下半部には脚注を書くか，書かない場合でもそのために空けておく，という使い方をしているが，本文のテキストとは異なるものを書くときには，ページの上から下までびっしり使っているのである。「5） 信用。架空資本」については，さきにふれた「[追補]」，「混乱」，「混乱。583ページ」では，後者の使い方をしているのであって，これが，これらの部分が材料集録ないし抜萃ノートであることを示唆しているということになる。筆者はかつて，この用紙の使い方をも指摘して，エンゲルス版第25~27章のなかでこの「[追補]」にあたる部分を「雑録」と見なすべきことを指摘したのであった[8]。なお，これは推測でしかないが，筆者は，「5） 信用。架空資本」の編集にあたってエンゲルスがこのようなページの使い方の違いに注意しなかったのは，彼が主として，口述筆記によって作成した原稿を使ったために，この違いを見落したためではなかったか，と考えている[9]。

第5に，「1862年12月のプラン」に見られた「10） 資本主義的生産の総過程における貨幣の還流運動」は，その後どうなったのか，という点に

ついての言及である。「成立と来歴」は，これについて簡単に，マルクスは「この第3部草稿のためにそのような章を書くことをしなかったけれども，基本的なものは第4章のなかに取り入れられた」，と書いている。

この一文の根拠は，おそらくは，次のことにあるのであろう。すなわち，マルクスが第3部第1稿の第1章を書いたのちに，第4章の執筆にかかるまえに書いた第2部第1稿では，第3部の第4章以降について，明らかに次のようなプランをもっていた[10]。

第4章　商業資本および利子生み資本

第5章　地　代

第6章　諸収入とその諸源泉

第7章　資本主義的生産の総過程における貨幣の還流運動

〔結び　資本と賃労働〕

ところが，マルクスは1865年7月31日付のエンゲルスあての手紙では，「理論的な部分を完成するためには，まだ三つの章を書かなければならない」（MEW, Bd.31, S.132）と書いた。ここでの「三つの章」とは，

第4章　商業資本および利子生み資本

第5章　地　代

第6章　諸収入とその諸源泉

の三つであるか，それとも，

第4章　利子生み資本

第5章　地　代

第6章　諸収入とその諸源泉

の三つであるか，このどちらかでしかありえないのであって，ここではすでに，「資本主義的生産の総過程における貨幣の還流運動」は消えている[11]。だから，この7月31日の手紙を書いたのは，第4章に着手するまえか第5章に着手するまえかのいずれかであるから，いずれにせよ，「還流運動」を独立の章にする構想は，第2部第1稿を終えて第4章ないし第5章にかかるまでのあいだになくなったということになる。つまり，前者

であれば第4章に着手するまえということになり，後者であれば，第4章の中途ですでに第5章を独立させることを決めたあと，第5章に着手するまえということになる。いずれにせよ，第4章の執筆とほぼ時を同じくして，「還流運動」にかんする章の構想は消えたのである。これが，おそらくは，MEGA 編集者が「基本的なものは第4章のなかに取り入れられた」とした理由であったろう。

だからこの言明は，「還流運動」がどの時期に消えたのか，ということの推定としては十分な理由があると言うことができるが，しかし，それが消えたのがはたして「基本的なものが第4章に取り入れられた」ことによるのかどうか，ということになると問題が残るであろう。おそらく，このような判断は，『1861−1863年草稿』のなかの「挿論。資本主義的再生産における貨幣の還流運動」の内容を念頭に置きながらなされたものであろうが，「還流運動」の「基本的なもの」が第3部第4章で論じられていると言いうるのであろうか。むしろそれは，第7章のなかに吸収されることになったと見るべきではないであろうか，という疑問が残るのである。

最後に第5に，MEGA 編集者は，第7章が第6章と並行して書かれたという推定を行なっている。ページづけその他の「成立と来歴」が挙げている諸典拠から見て，この推定は妥当なものと思われる。

1) ここでの記述は，編集者たちがこれまで知りえた，この草稿に関する考証的な諸研究の成果に依拠していることが明らかであるが，旧「編集方針」にもとづいて編集された他の MEGA 諸巻と同様に，どのような研究に依拠したのかについては言及していない。今後刊行される新「編集方針」による諸巻では，利用された諸研究も挙示されることになっている。

2) **В. Выгодский, Л. Миськевич, М. Терновский, А. Чепуренко,** ***О периодизации работы К. Маркса над《Капиталом》в 1863−1867 гг.,*** **《Вопросы экономики》,** No.8, 1981. 邦訳：中野雄策訳，「1863−1867年における K. マルクスの『資本論』の執筆の時期区分について」，『世界経済と国際関係』第56号，1982年。

3) 市原健志氏は，第3部の第1−3章および第2部の諸部分が，どのような順

序で，いつ書かれたのか，ということについては，ありうるさまざまの可能性を考えてみる必要があることを説得的に示されている。市原健志「『資本論』第三部草稿のはじめの三つの諸章の執筆順序について」，『商学論纂』第34巻第1号，1992年。なお，筆者も，「第3部第1稿について」，『経済志林』第50巻第2号，1982年で，第2章が最初に書かれたという4著者の共同稿での推定に疑問の余地があることを指摘している（114–115ページ）。

4)　市原健志氏は，「成立と来歴」の草案の氏による翻訳への注のなかで，四著者の共同稿に触れられ，「MEGA編集部の見解は基本的にこれによっていると思われる」と書かれている（「MEGA第Ⅱ部第4巻第2分冊・成立と来歴」，『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第14号，1991年，53ページ）。たしかに，第3部が第2章から第1章へ，という順序で書かれたという推定についてはそのとおりであるが，第2部を書くために第3部を中断した箇所の推定についてはそうではない。そのことは，この共同稿の考証とこのたびの「成立と来歴」における考証とを対比すればすぐわかることである。氏は，この共同稿で述べられた，第3部第1稿と第2部第1稿との時期的関係についての考証がその後4著者たちによって撤回され，また，この第3部第1稿の編集にあたったミュラーの論文では筆者の考証を支持することが表明され，さらにMEGA第2部第4巻第1分冊のなかの第2部第1稿についての「成立と来歴」で，かつて筆者が述べた見解とまったく同じ典拠をもってまったく同じ推定が行なわれていることにまったく気づかれなかったか，あるいは意識的に触れることを避けられたようである。この点については，拙稿「『資本論』第2部および第3部の執筆時期の関連についての再論」，『経済志林』第57巻第3号，1989年，を参照されたい。

5)　この点については，拙稿「『資本論』第3部第1稿について」，前出，122–134ページで，詳細に論じた。

6)　テキストのなかで第4章の表題とされている「商品資本および貨幣資本の商品取扱資本および貨幣取扱資本への，すなわち商人資本への転化。」という部分への異文（341ページ2–4行への異文）では，次のように記載されている（ここでは，『資本論草稿集』での異文注の記載方法に従う）。

「「商品資本および貨幣資本の商品取扱資本および貨幣取扱資本への，すなわち商人資本への転化。〔Verwandlung von Waarencapital und Geldcapital in Waarenhandlungscapital und Geldhandlungscapital oder in kaufmännisches Kapital.〕」←「商品資本および貨幣資本の商品取扱資本および貨幣取扱資本への，すなわち商人資本への転化。利子および産業利潤（企業利得）への利潤の分裂。利子生み資本。〔Verwand-

lung von Waarencapital und Geldcapital in Waarenhandlungscapital und Geldhandlungscapital oder in kaufmännisches Kapital. Spaltung von Profit in Zins und industriellen Profit (Unternehmungsgewinn.) Das Zinstragende Capital.〕」←「商品取扱資本および貨幣取扱資本。利子および産業利潤（企業利得）への利潤の分裂。利子生み資本。〔Das Waarenhandlungscapital und das Geldhandlungscapital. Spaltung von Profit in Zins und industriellen Profit (Unternehmungsgewinn.) Das Zinstragende Capital.〕」〔以上のすべてに下線が引かれているが，ここでは省略した。〕

最初の変更はインクで，二番目の変更は鉛筆で行なわれている。」

7) ただし，いわゆる「1862年12月のプラン」では，「8) 産業利潤と利子とへの利潤の分裂。商業資本。貨幣資本。」とあるが，この順序は，『1861−1863年草稿』のなかで「収入とその諸源泉」以降実際に論じられたものが，その順序で挙げられているものである。

8) 拙稿「「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章）の草稿について（上)」，前出，56−60ページで，この点への注意を促し，エンゲルスによるこの見逃しと結びついた，彼の版の第26章が含む編集上の問題を指摘したうえで，「「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章）の草稿について（中)」，『経済志林』第51巻第3号，1983年，30−49ページで，第3部第5章のエンゲルス版第25章のなかの「雑録」部分を紹介し，「「貨幣資本の蓄積」(『資本論』第3部第26章）の草稿について」，『経済志林』第57巻第4号，1990年，135−139ページで，かさねてこの点についての注意を喚起し，さらにこの拙稿で，第3部第5章のエンゲルス版の第26章該当部分を紹介した。

9) 口述筆記によって作成された原稿を使用したことは，さらに，エンゲルスに，いま一つの誤りをもたらすことになったように思われる。すなわち，エンゲルスは，草稿の321ページ（MEGA, Ⅱ/4.2, S.479）にある，「貨幣資本の蓄積とそれが利子率におよぼす影響」という見出しを，それがその直後の，『通貨理論論評』およびハッバードからの引用についてのものでしかなかったのに，そこから「[資本主義的生産における信用の役割]」の直前までのすべての部分についての見出しだと見なしたのである。この誤読は，こんどのMEGA版では，当然のことながら訂正されている。この点についても，前注に挙げた拙稿の同じ箇所で詳論している。

10) Siehe MEGA, Ⅱ/4.1, S.289, S.305, S.321 u. S.381. 中峯照悦・大谷禎之介他訳『資本の流通過程』，大月書店，1982年，183, 201, 222, 194, の諸ページを参照されたい。

11）この点についての考証は，拙稿「「信用と架空資本」（『資本論』第3部第25章）の草稿について（上）」，前出，20−22ページ，を参照されたい。

＊　＊　＊

【資料】 MEGA付属資料から

［ここに訳出するのは，1993年（前述のように名目上は1992年）刊行の新MEGA第2部第4巻第2分冊に収められたマルクスの『資本論』第3部第1稿についての，同じ分冊での「解題」および「成立と来歴」である。(Karl Marx/Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA), II/4.2. Karl Marx: Ökonomische Manuskripte 1863−1867, Teil 2. Berlin 1992. Das Kapital (Ökonomische Manuskript 1863−1865), Drittes Buch. „Einführung“ sowie „Entstehung und Überlieferung.“）

ここに訳出した「解題」のたたき台となったミュラー執筆の「序文」は平林一隆氏によって訳出されている（『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第13号，1991年)。相当の書き換えや置き換えが行なわれており，一部では，叙述の内容そのものが変更されている。興味のある方は比較・検討されたい。

「成立と来歴」についても，すでにその原案の翻訳が市原健志氏によって行なわれている（『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第14号，1991年)。原案と印刷された最終の文面とはおおよそ合致しているが，部分的な変更や書き加えがある。興味のある方は比較・検討されたい。

訳文のなかで〔　〕が囲まれて部分は訳者が挿入したものである。草稿本文中の角括弧は｛　｝で示した。

なお，頻出する「MEGA②」という略号の右肩の②は，このMEGAが，1927−1935年に刊行された第1次のMEGAにたいする第2次のMEGAであることを示す記号である。］

解　題

第2部第4巻第2分冊は，「総過程の諸形象〔Die Gestaltungen des Gesamtprocesses〕」という表題をもつ，『資本論』第3部のためのマルクスの草案を収めている。この草案は1864年夏から1865年12月にかけて成立し，『1863−1865年草稿』を締めくくるものとなった。この草案は，

本書に見られる形態では，これまで公刊されたことがなかった。エンゲルスはこの草案を，第3部のための「主要草稿」と名づけた（カール・マルクス『資本論』第3巻第1分冊，フリードリヒ・エンゲルス編，ハンブルク，1894年，Ⅵページ〔MEW, Bd.25, S.11〕）。この「主要草稿」は，比較的小さい草稿の集りである「第3部に属するもの」（MEGA②第2部第4巻第3分冊〔未刊〕を見よ），第1章「費用価格と利潤」の改作のためのいくつかの書きかけ〔『資本論』第3部の第2−4稿〕，剰余価値率と利潤率との関係の数学的計算を含む一草稿，そしてその他の材料（MEGA②第2部第15巻〔未刊〕を見よ）によって補われて，『資本論』第3巻の，エンゲルスによって編集され1894年に刊行された版（MEGA②第2部第16巻〔MEW, Bd.25〕を見よ）の基礎となった。

1864年−1865年のころ，第3部の実体とその内的論理が確定しているように，マルクスには思われた。けれども第3部は，印刷のためにきちんと仕上げられた第1部とは違って，荒削りのかたちのままにとどまったのであった。すでに第1章を書いているときに，マルクスにもろもろの疑念が生じて，それらがのちのさらに立ち入った研究をもたらすことになった。そして先に進めば進むほど，いま書いているのは清書稿ではなく，印刷のための最後の仕上げではないのだ，という彼の意識は強くなっていった。経済理論のもろもろの重要な要素がやっと研究途上にあって，若干の概念が，またこれらの概念を全体のなかに組み入れることが，まだ暫定的な状態にあり，もろもろの空白もあった。もしマルクスが推敲を行なったなら，彼は，分析を補足しさらに推し進め，かなりの思考行程を要約ないし削除し，その他のもろもろの思考行程を歴史的例証や学説史的余論によって深めたことであろう。このような過程があったなら，おそらくそのなかでこの部の篇別構成も，もっと詳細な，整然としたものとなっていたことであろう。

70年代にマルクスは，ロシアの土地所有形態，ならびにアメリカ合衆国およびその他の諸国における産業諸関係，農業諸関係，金融諸関係を研

究した。これらの研究のもろもろの結果は，明らかに，第3部の対応する諸章を執筆するときに取り入れられるべきものであった。彼の関心は，もちろん引き続き，西ヨーロッパ諸国の経済的状況にも向けられていた。第2巻の印刷は，1878年11月にはマルクスがまだそう考えていたように，1879年の年末にも可能だったかもしれない（1878年11月15日付のダニエリソンあてのマルクスの手紙〔MEW, Bd.34, S.358〕を見よ）。けれども彼は結局，どんなことがあろうと「現在のイギリスの産業恐慌がその頂点に達する以前には」第2巻を刊行しない，と言明した。「いろいろの現象がこのたびは特異で，多くの点で，過去に起こったものとは違っています。［……］だから，現在の事態の経過をそれが成熟しきるまで観察しなければならないのであって，そのときはじめて事態を「生産的に」，つまり「理論的に」，「消費する」ことができるのです」（1879年4月10日付のダニエリソンあてのマルクスの手紙〔MEW, Bd.34, S.370−371〕）。彼の見るところ，「ちょうどいましがた，若干の経済現象が新しい発展段階にはいった」ところであり，これらの現象が，新たな仕上げを要求していたのである（1980年6月27日付のフェルディナント・ドメラ・ニーウェンホイスあてのマルクスの手紙〔MEW, Bd.34, S.447〕）。

1857年から1865年までのあいだに成立した，『資本論』第3部のそれぞれ異なる草案は，労苦を重ねた，けっして直線的ではなかった研究過程を反映している。それらの表題，すなわち，〔『経済学批判要綱』における〕「第3の項目。果実をもたらすものとしての資本。利子。利潤。（生産費用，等々）」（MEGA②第2部第1巻第2分冊，619ページ〔『資本論草稿集』②，552ページ〕），〔『1861−1863年草稿』における〕「第3章　資本と利潤。」（MEGA②第2部第3巻第5分冊，1598ページ〔『資本論草稿集』⑧，88ページ〕），〔第3部第1稿における〕「総過程の諸形象」，というそれぞれ異なった表題がすでに，資本の分析の最初のプランが改作されたことを示唆している。

草稿『経済学批判要綱』ではマルクスはまだ，価値の生産価格への修正

は非本質的なことであって資本の本質そのものに関わるものではない，ということから出発していた。剰余価値の均等化過程，すなわち，個々の資本家のあいだへの，ないしは，資本家の特殊的グループのあいだへの剰余価値の分配は――そこで主張されているところでは―― 一つの一般的利潤率と諸価格を等置することとにもとづいて行なわれる（MEGA②第2部第1巻第2分冊，681ページ〔『資本論草稿集』②，683ページ〕を見よ）。つまりマルクスは，資本主義的生産過程および再生産過程の調整メカニズムとしての競争がもつ意味について，すでに或る種の諸表象をもっていたのである。彼は，資本に内在的な諸法則，資本の諸傾向が，競争のなかではじめて実現されることを確認した。競争がこの生産様式の諸法則を打ち立てることはないとしても，それでも競争はこれらの法則の執行者なのである（MEGA②第2部第1巻第2分冊，448ページおよび625ページ〔『資本論草稿集』②，237ページおよび561ページ〕を見よ）。そうであるかぎりで，競争は経済的進歩の推進力として作用する。マルクスは競争を「ブルジョア経済の不可欠の牽引車」と見なした（同前，448ページ〔『資本論草稿集』②，237ページ〕）。そのさい彼は競争を，概念的に，認識の二つの段階に区分した。商品価値がそれに含まれている労働によって規定されているという法則は，競争によって覆されたように見える。必要労働時間は資本の運動によって規定されており，競争によってはじめて措定されている。「これが競争の基本法則である。需要，供給，価格（生産費用）が，それに続く形態規定である。市場価格としての価格，または一般的価格」（MEGA②第2部第1巻第2分冊，541ページ〔『資本論草稿集』②，419ページ〕）。マルクスはこの草稿では，平均利潤率が形成されるということになるのはどのようにしてか，という問題はもちろん論じなかった。けれども彼は――明らかに第2の叙述段階に連関して――，「これ以上のことは，競争に関する項目で論じるべきことである」（同前，347ページ〔『資本論草稿集』②，62ページ〕）と注釈を加えていた。

「剰余価値に関する諸学説」のなかでマルクスは，平均利潤および生産

価格についての，ならびに，利潤，地代，利子という剰余価値の諸形態についての自分の見解を根拠づけた。そのさい彼が逢着したのは，価値と価値の転化諸形態とのあいだの関連，ならびに，純粋な姿態における剰余価値と剰余価値の特殊的諸形態とのあいだの関連である。彼の言うところでは，これらの関連は，それらの基礎から出発し，「見えない中間諸項」，「諸媒介」あるいは「諸転化」の証明を通じて展開されるべきものである（MEGA②第2部第3巻第4分冊，1481−1487ページ〔『資本論草稿集』⑦，452−459ページ〕，およびその他のページを見よ）。それらのなかでもとりわけ重要であるのは，競争の二つの基本形態，すなわち，商品の最も有利な販売をめぐって行なわれる一生産部門内部での競争，および，最良の資本投下部面をめぐって行なわれる生産諸部門のあいだでの競争である。これらの競争は，価値の市場価値および生産価格への修正，剰余価値の利潤および平均利潤への修正をもたらすのである。マルクスはこれらの形態を，資本主義的生産の総過程を制御するような，そして資本家，土地所有者，賃労働者の意識のなかでそうしたものとして現われる，直接に実践的な形態であると理解した。まったく同様に彼は，労働力商品の価値の転化形態である労賃を労働の「調整価格」であると理解した（MEGA②第2部第3巻第6分冊，2150ページ〔『資本論草稿集』⑨，398ページ〕を見よ）。

叙述の論理にとって，このことから次のことが明らかとなった。すなわち，価値の説明および剰余価値の説明は，資本主義的競争のなかでの実現が捨象されていたかぎりでは，不完全だった，ということである。平均利潤の分析が産業資本のところにとどまっていたこと，したがってそれが産業利潤と商業利潤とへの分割，ならびに利子と企業利得とへの分割という利潤の両分割を無視していたこと，そしてまたそれが農業における剰余価値の独自な諸形態である差額地代および絶対地代を含んでいなかったことについても，同じことが言えた。これらすべての形態は資本の本質の一部をなすのである。その意味でマルクスは，ブルジョア経済学者たちが剰余

価値それ自体を剰余価値の特殊的諸形態と同一視ないし混同したこと，そして価値と価格とを相互にはっきりと区別しなかったことが，彼らの誤まった理解であったことを立証した。だからこそ，彼らの体系はいずれも不可避的に一連の誤謬を示すことになったのである。彼の見解によれば，剰余価値の抽象的な諸法則が経験的な利潤に即して直接に示されることはありえない。というのも，そうでなければ，資本主義的生産様式の内的，必然的な関連は認識不可能なものとなるのだからである（MEGA②第2部第3巻第5分冊，1630ページ〔『資本論草稿集』⑧，139−140ページ〕を見よ）。

マルクスははじめ，「資本一般」と資本の「実在的な」運動——競争と信用——とを徹底して分離していたが，彼はこの分離を次第に放棄した。『……要綱』のあと，そして「……諸学説」の執筆にかかる直前には，彼は「最終ノート」のなかでまだ，剰余価値と利潤との区別は一つの転化でではなくて，二つの転化で示されるべきだと考えていた。彼は次のように書いた。——剰余価値が前貸された資本で尺度される第1の転化では，利潤は資本によって基礎づけられ措定された形態として現われる。剰余価値と利潤とのこの形式的な区別は，一般的な利潤率の形成が考察されることになると，実質的な区別に発展する。そこでは諸利潤はそれらの平均量に還元されるのであって，この還元は，利潤の形態と同時に，利潤の実体つまり絶対量にも手をつけるのだ，と。マルクスはこの転化を，第2の実際上の帰結として，資本そのものの本性から生じる第1の転化の必然的な結果として特徴づけた（MEGA②第2部第3巻第5分冊，1628−1629ページ〔『資本論草稿集』⑧，137ページ〕を見よ）。そして彼はこの「決定的に一般的なこと」を「資本一般」の叙述に取り入れるつもりであった（同前，1623ページおよび1605ページ〔『資本論草稿集』⑧，129ページおよび99ページ〕を見よ）。異なった生産部門における異なった利潤率を前提する，平均利潤率の細目にわたる考察は，競争に関する章で行なわれることになっていた。「……諸学説」のなかで，マルクスはこの方法を事実上廃

棄した。研究の過程では有効だと認められてきたそのような切断のもつ諸限界が彼に分かってきたのであって，彼は，1862年12月のプラン草案が証明しているように，経済的諸関係の最も重要なもろもろの形態上の区別を資本関係の叙述のなかに取り入れようと考えたのである（MEGA②第2部第3巻第5分冊，1861−1862ページ〔『資本論草稿集』⑧，541−542ページ〕を見よ）。それは『資本論』の第1部および第3部のための構成プランだったが，マルクスは，これらの部の執筆を進めるなかで，これらの構成プランにさらにもろもろの変更を加えていった。

マルクスは第3部の草案のなかで，一つの平均利潤率の形成を競争の「主要現象」と特徴づけた。「産業資本家が，全剰余価値を実現するのではなくて，反対に彼の商業上の仲間たちなどに剰余価値の一部分を実現することを任せる，ということは，法則でさえある。さまざまの階級のもとへの利潤の分配はこの法則と関連している」（〔本分冊，〕56ページ）。第1章のもっとのちの草案——〔第3部〕草稿「Ⅲ」（MEGA②第2部第4巻第3分冊〔未刊〕を見よ）——は，この関連で，修正された記述を含んでいる。そこでマルクスは，「一般的利潤率とそれによって規定されるいわゆる生産価格とを規制する法則」を「経済学によってこれまで理解されなかった，資本主義的競争の根本法則」と名づけた（カール・マルクス『資本論』第3巻第1分冊〔1894年のエンゲルス版〕，……12ページ〔MEW, Bd.25, S.47〕をも見よ）。この意味では，資本の一般的概念はただ規制的原理に関する記述を含むだけであって，競争はただ，「その他の論題を取り扱うのに必要な」かぎりでのみ取り入れられたのである（1868年3月6日付のルイ・クーゲルマンあてのマルクスの手紙〔MEW, Bd.32, S.359〕）。だから，『資本論』は競争の現実的運動の叙述を含んでいない（〔本分冊，〕853ページ）。

第3部のための草稿を1862年のプラン草案〔『1861−1863年草稿』，1861ページ（『資本論草稿集』⑧，541ページ）〕と比べてみて分かるのは，ここではプラン草案にはなかった理論的諸問題が取り上げられている

ことである。テキストのなかに見られるかなりの数の叙述方法にかかわる注釈もこのことを明らかにしている。けれどもマルクスは，資本主義的生産様式の若干の現象には意識的に手をつけなかった。なぜならそれらの現象は『資本論』プランの外にあるものだったからである。このことは，市場価格の運動，信用制度の個々の用具についても言えるし，また土地所有および賃労働の，恐慌の，世界市場での資本の運動の，そして国家の経済的機能の，細目にわたる研究についても言える。第3部の草稿でマルクスが述べたように，資本主義的生産様式のこれらのより具体的な諸形態は，あるいは書かれるかもしれない『資本論』の続篇に留保されていた（〔本分冊,〕178ページを見よ）。彼の著作が取り扱うべきものは資本の一般的本性であった。そこで「そもそもつねに前提されているのは，現実的な諸関係はそれらの概念に対応するということ，言い換えれば，同じことになるが，現実的な諸関係は，ただ，それらがそれら自身の一般的な類型を表現するかぎりでのみ叙述される，ということである」（〔本分冊,〕215ページ）。

この草稿の冒頭には，剰余価値ないし剰余価値率と利潤ないし利潤率との関係についてのもろもろの詳論がある。費用価格の客観的な規定と，資本家の立場からの主観的な規定とのあいだの区別（〔本分冊,〕54ページを見よ），つまり厳密に言えば，資本家的な費用価格と現実の費用価格とのあいだの区別が行なわれている。けれども，費用価格が諸資本の競争のなかに現われる諸現象の説明のための必然的な出発範疇として一貫して固定することはなされてはいない。第1章でマルクスは，剰余価値率と利潤率との関係のありうるもろもろの変形に取り組んだが，それを完結するにはいたらなかった。マルクスは何度も繰り返して，これらの変形の本質的な諸契機を図式的にまとめよう（〔本分冊,〕22ページ），剰余価値率と利潤率との関係の諸法則を見極めようと試みた。結局のところ彼は次のように書き留めるにいたった――そしてこのことは，類推すれば，この草稿の他の諸論点にも当てはまるであろう――。「だから，このごたごたを最後

に編集するさいには，ただ合理的なものだけが取りだされなければならないだろう。こうした細目のすべてに立ち入ることは，研究そのものにとってはもちろん必要だが，しかし読者にとっては，けっして必要ではない」（〔本分冊，〕83ページ）。マルクスは，そのほか資本の回転が利潤率に及ぼす影響が説明されるべきだと考えていたのであって，このことは，一つの表題（〔本分冊，〕208ページを見よ）と第2部の草稿での詳論（MEGA②第2部第4巻第1分冊，262ページおよび266ページ〔『資本の流通過程』，大月書店，1982年，150ページおよび156ページ〕を見よ）が示唆している。しかし彼は，これらの欠落部分を埋めることはしなかった。「3）　不変資本の充用における節約」の項および「4）　原料の価格変動」の項――この両項で例証に使われた資料は主として工場監督官の報告からとられている――は，同様に，荒削りのかたちのままに残された。

第1部「資本の生産過程」が刊行されたのちマルクスは，第2部「資本の流通過程」に取りかかるのではなくて，第3部に，もっと詳しく言えば，この部のうちの，平均利潤および生産価格に関する第2章に取りかかった。そのあとで彼は第3部の第1章と第3章とを書いた。明らかに，彼には，『1861−1863年草稿』でなされた剰余価値の利潤への転化の問題の仕上げ（MEGA②第2部第3巻第5分冊，1598−1606ページ〔『資本論草稿集』⑧，87−101ページ〕を見よ）が，さしあたりは十分なものに思われたようである。

第3部第2章の直前に書かれた第1部第6章「直接的生産過程の諸結果」（MEGA②第2部第4巻第1分冊，24−136ページ〔『直接的生産過程の諸結果』，大月書店，1970年〕を見よ）のなかでマルクスは，資本の叙述における二つの「円環進行〔Zirkellauf〕」を区別した。一方の円環進行は，流通をも含む資本主義的商品生産を包括するものであって，前提および結果という観点から資本主義的に生産された商品を主題としている。これにたいして他方の円環進行は，全体としての資本の叙述に当たるものである。こちらは，価値の生産価格への転化についての学説を包括すべき

ものであり，剰余価値および剰余価値の特殊的諸形態に注意を払うのと同様に，平均利潤にも注意を払うべきものである。第1部から第3部に移ったことは，明らかに，マルクスが，本質と直接的な現象形態との，問題を孕んだ関連を矛盾なく説明すること，運動法則それ自体を暴くばかりでなく，同じくこの法則の貫徹メカニズムを証明することにも努めていたことに帰せられるべきものであった。彼の考えでは，理論全体の内的な一貫性はこのことに基づいているのである。彼にとってまずもって肝心であったのは，問題の二律背反を明示的にはっきりさせ，科学的に批判的な解決を与えることであったが，最後には，体系的に論述することに重きが置かれていた。

注目に値するのは，『1861−1863年草稿』にも同じような経過があったことである。そこでは，この著作の「資本の生産過程」の部分での剰余価値理論についての詳説（MEGA②第2部第3巻第1分冊〔『資本論草稿集』④〕を見よ）に直接に続いたのは「第3章　資本と利潤」（MEGA②第2部第3巻第5分冊，1598−1675ページ〔『資本論草稿集』⑧，87−209ページ〕を見よ）であって，これはどうやら1861年から1862年にかけての年の変わり目のころに執筆されたもののようである。これに従えば，マルクスがこの「第3章」を書いたのは，これまで主張されていた（MEGA②第2部第3巻，付属資料，2394ページを見よ〔『資本論草稿集』④，45*ページ〕）のとは違って，「……諸学説」のあとではなく，それのまえだったのである。

第3章の対象である平均利潤率の傾向的低下の法則を，マルクスは『要綱』のなかで次のように特徴づけていた。「これは，あらゆる点で，近代の経済学の最も重要な法則であり，そして最も困難な諸関係を理解するための最も本質的な法則である。それは，歴史的見地から見て，最も重要な法則である。それは，その単純さにもかかわらず，これまでけっして理解されたことがなく，まして意識的に言い表わされたこともない法則である」（MEGA②第2部第1巻第2分冊，622ページ〔『資本論草稿集』②，

557ページ〕)。マルクスは『要綱』で，スミス，リカードウ等々の諸命題と批判的に対決するなかで，法則そのものについてのはじめての確認を行なった。彼は反対に作用する諸要因を挙げたが，その後彼は『1861−1863年草稿』で，この諸要因の分析をさらにおし進めた。第3部の草案で，いまや彼はさらに，この二つの点を超え出てこれとは別個に，この法則の内的諸矛盾の開展をはっきりと示したのである。

マルクスは意図的に，平均利潤率の傾向的低下の法則を，利潤がそれの特殊的な自立化された諸断片に分裂することを考察するまえに論じた。「利潤がさまざまの部分に分かれてさまざまの部類の人格の手にはいることから独立にこの法則の叙述が行なわれるということは，はじめから，この法則がその一般性にあっては，そうした分裂からも……分裂した利潤諸範疇の関係からも独立したものであることを示している。」(〔本分冊，〕288ページ。) 彼は，利潤がそれの本質からすれば，社会的総資本にたいする関係における，賃労働によって創造された剰余価値であること，それにたいして，さまざまの資本家グループのあいだでの利潤の分配は二次的な操作であることを明確にしようとしていた。平均利潤率の傾向的低下の法則は，もろもろの産業資本によって構成されている総資本の価値増殖度の発展傾向をあらわにするような法則なのである。

この第1の作業段階でマルクスが取り組んだのは，産業諸資本の諸関係であり，それらの物象的形態である利潤，平均利潤および生産価格であり，また，利潤率の傾向的低下の法則であった。ここではまだ，プラン草案との一致が見られた。プラン草案との一致は，第2部と講演『価値，価格，利潤』〔『賃金，価格，利潤』，MEW，Bd.16，S.101−152〕との仕上げのあとに始まった第2の作業段階については，ただ限定的に言えるだけである。地代はもはや，価値と生産価格との区別のための「例証」として考察されるのではなくて，農業における剰余価値生産の独自な形態として提示されることになった。以前の計画とは違ってマルクスは，資本主義的競争の根本法則を論じたすぐあとに利子を論じるのではなく，また利子と

商業利潤とを――平均利潤率の形成の過程でそれぞれ質的に異なった役割を演じるこの両者を―― 一つの章で論じるのではなくて，両者を分離し，また彼の著作のなかでの両者の位置を置き換えたのである。

商人資本に関する章と利子生み資本に関する章との仕上げの基礎になったのは，「収入とその諸源泉」（MEGA②第 2 部第 3 巻第 4 分冊，1450–1539 ページ〔『資本論草稿集』⑦，404–543 ページ〕を見よ）でのもろもろの構想的な思索であった。「……諸学説」のこの最後の部分には，商人資本および高利資本――古風な，そしてそれ自体自立した資本諸形態――は，産業資本の生成過程でまずもって「打ち破られ」，そしてこの資本に従属させられる，という命題が含まれている。この二つの資本は「産業資本自身の派生的または特殊的な諸機能に」，「産業資本自身の生活過程の諸形態」に転化される（同前，1465–1466 ページ〔『資本論草稿集』⑦，424–427 ページ〕）。つまり，商人資本が産業資本の一機能として現われるのと同様に，資本主義的信用制度も産業資本の所産として現われるのである。『要綱』にはまだ，資本主義的再生産過程における商人資本および利子生み資本の機能と作用様式とについての研究は見られなかった。マルクスがそこで主として研究したのは，この両形態が資本主義的生産様式の生成過程で果たす役割であった。「収入と諸源泉」ののちにはじめて，マルクスは――「商業資本。貨幣取扱業に従事する資本」という表題のもとで――まず商人資本の主要な諸規定を研究したが，それに付随するかたちで利子生み資本を研究した（MEGA②第 2 部第 3 巻第 5 分冊，1545–1597 ページおよび 1682–1773 ページ〔『資本論草稿集』⑧，5–85 ページおよび 222–379 ページ〕）。経済学の著作のなかに利子生み資本をどのように組み入れるべきかが十分に明らかでなかったことが，さらに研究を重ねることを要求していたのである。マルクスは『1861–1863 年草稿』で，商人資本が自己の特殊的機能として流通過程を媒介する，流通のなかで自立化された資本形態であることを明らかにした。彼は，商業利潤の源泉とそれの取得のメカニズム，純粋に商業的な賃労働の不生産的な性格，そして商

人資本の回転の独自な作用を研究した。これらの全体は，まだ自己了解の色合いを見せており，そのうえほとんど篇別構成されていない。第3部の草案に最終的に取り入れられたのはここで考えられたことのすべてではなかったが，諸概念はより明晰に言い表わされており，叙述は構造化されている。このことはとりわけ，産業資本の循環過程における機能諸規定としての貨幣資本と商品資本との区別づけについて，また商人資本の二つの亜種としての商品取扱資本と貨幣取扱資本との区別づけについて言える。

『1861−1863年草稿』のなかにあって第5章の執筆にマルクスが利用できたものは，さらに具体化することを必要としていた一般的記述だけであった。彼の構想では，利子生み資本についてのもろもろの記述は，資本主義的生産様式の経済的諸法則の叙述のなかに置かれるべきものであった。信用制度とそれが資本主義のなかで果たす機能について，また，信用制度と経済恐慌との相互連関については，彼はすでに，50年代の初頭に一定のイメージを得ていた。その典拠となるのは，「ロンドン・ノート，1850−1853年」，とりわけこのうちのノート第Ⅰ−Ⅶ冊であり，また，これらと関連をもつ草稿である「地金。完成した貨幣制度」および「省察」である（MEGA②第4部第7巻および第4部第8巻〔「省察」，『マルクス＝エンゲルス全集』補巻3，151−160ページ〕を見よ）。マルクスはいまや，利子生み資本の理論の根本的な諸側面を論じたのちに，これを新たな事実とデータとをもって——「混乱」という表題のもとで——補足した。草稿のこれらの部分は，時事的刊行物——とりわけ銀行制度に関するもろもろの議会報告——から集録された，また「ロンドン・ノート，1850−1853年」で集録されていた事実材料の研究および分析という性格をもち，またとくに，これらの事実とブルジョア経済学者や事業家の陳述との対比という性格をもっている。この研究のまえに開かれていたのは，多くの問題が——発達した銀行・信用制度にかかわる，また貨幣理論上の論争にかかわる問題が——ひしめいている領域であった。

マルクスはまず利子生み資本の性格および機能を論じ，次にはさらに信

用の基本的形態である銀行信用および商業信用を取り上げてそれらの主要な諸特徴を定式化した。これに加えて彼は，信用貨幣を，とりわけ手形および銀行券発行を，信用貨幣の金との兌換性および為替相場を，ならびに架空資本および株式会社を分析した。ほかでもないこれらの特殊的形態の諸特質こそが，たいていは，直接に研究の過程から得られたままにあちこちで述べられており，しばしば関連を欠いたほとんど体系性のない仕方で論じられている。もし利子生み資本の最終的な叙述がなされたなら，それは当然に，幾重にも繰り返され広範囲に繰り広げられていた材料を，理論の構築にどうしても必要な大きさにまで凝縮することを必要としたであろう。明らかに，少なからぬ観点が，資本の核心構造にかかわらないことから，ここで考慮されることなく残されたであろう。それらは，競争に関する独自の論稿のあとに予定されていた，信用に関する独自の論稿に取り入れられたことであろう（1862 年 12 月 28 日付のクーゲルマンあてのマルクスの手紙〔MEW, Bd.30, S.639−640〕を見よ）。マルクスはこの章に，それ特有の重要な意味をもたせたいと考えていた。「第 2 巻は大部分があまりにも高度に理論的なので，ぼくは信用に関する章を，ぺてんと商業道徳との実状の告発に利用するだろう。」（1868 年 11 月 14 日付のエンゲルスあてのマルクスの手紙〔MEW, Bd.32, S.204〕）。

第 6 章で展開されている，超過利潤の地代への転化に関するマルクスの諸見解は，いくつものステップを踏んで作り上げられたものであった。彼は，40 年代には差額地代についてのリカードウの構想に従い，50 年代には，地代の体系形成者たちの諸著作を読み，加えて農芸化学や地質学のような科学分野の諸成果を摂取することによって，経験的かつ学説史的な基礎を創造し，そしてそののちに「……諸学説」で，最終的に彼の地代理論を，絶対地代と差額地代との統一として展開したのであった。マルクスは，ロートベルトゥスの見解とリカードウの見解との対決のなかで絶対地代の理論を創造したのであって，この両者は，価値と生産価格との区別を認めなかったために，この地代の存在を，説明されなければならないもの

として残していたのである。リカードウは，自分の価値理論を首尾一貫して適用して，そもそも絶対地代が存在することを否定した。これにたいしてマルクスは，農業における生産もまた価値法則の基礎のうえに行なわれることを認め，自分の見解を平均利潤および生産価格の理論との関連のなかで論証した。

マルクスはこの第3部草稿では，「緒論」ののちに，項目「c）　絶対地代」に移った。それゆえ彼は，まずもって，土地所有者が直接かつ無媒介的に剰余価値の分配に参与する形態と取り組んだのである。

マルクスは，すでに1862年に，差額地代理論の叙述はなんの困難をももたらさないであろう，と強調し，問題はただ，広い範囲にわたる材料を十分に利用し，それを絶対地代から切り離して体系化することにあるだけだ，と述べていた。いまや，彼はまずもって，独占可能な自然諸力の充用のさいに生じる非農業的な超過利潤の形成を論じた。叙述の第1の抽象段階が，一般的な差額地代から農業の差額地代への移行によって形成される。第2の抽象段階では，農業特有のもろもろの差額地代の研究が続く。そのさい彼は，差額地代の形成にさいして関与する諸要因のさまざまの結合から，たとえば差額地代Ⅰと差額地代Ⅱとの結合，生産価格の発展，あるいは追加的な資本投下の異なった生産性から生じうる，多様な変形とさまざまの結合可能性とを挙げた。このことはまた，第6章がますます大きなものとなっていって，この仕事が終わったあとでマルクスがエンゲルスに次のように伝えなければならなかったことの一因にもなったと言ってよいであろう――「この「呪われた」本については，こういうことになっている。――それは12月末に完了した。地代に関する論述，つまり最後から2番目の章だけでも，いまのかたちのままではほとんど一冊の本となっている」（1866年2月13日付のエンゲルスあてのマルクスの手紙〔MEW, Bd.31, S.178〕）。

この章の終り近くに書かれた一つのプラン（〔本分冊,〕816–817ページを見よ）が示唆しているのは，マルクスが印刷用原稿を書き上げたなら，

彼は，最初に決めた体系編成を修正し，素材をもっと細かく篇別構成したであろう，ということである。その場合にはまずまちがいなく，「δ） 超過利潤の地代への転化」という表題をもつ一つの要約と，総再生産過程への編入にとって重要な，差額地代が利潤率に及ぼす影響についての項目とが，追加されたことであろう。そのほかマルクスは，本文のうちの，歴史的かつ学説史的な資料によってさらに裏付けられなければならない諸箇所にしるしをつけたのである。

第7章は資本主義的生産の総過程の総括的考察となったが，この考察は『1861−1863年草稿』のなかの「収入とその諸源泉」での彫琢に依拠することができた。この章の構造は，資本の概念についてのマルクスの諸見解が生成発展するのに対応して次第に作り上げられてきたものであった。『1861−1863年草稿』のためのプランで彼が構想していたのは，まだ，生産形態かつ分配形態としての労賃および利潤のことであったが（MEGA② 第2部第2巻，262ページ〔『資本論草稿集』③，460−461ページ〕を見よ），第3部のためのプランは，第7章の見取り図を，この章の執筆にはいるまえに付け加えられた「競争の外観」に関する項目にいたるまで，ほとんどすべての重要な項目にわたって描いたのであった。

第3部の草案でマルクスは折に触れて，もろもろの「歪められた形態」に言及した。彼は，「われわれが資本の実現過程〔Verwirklichungsproceß〕を追跡して行けば行くほど，資本関係はますます不可解となり，その内部組織体の秘密をさらすことがますますわずかとなって行くであろう」（〔本分冊，〕64ページ）と述べた。そこで生産価格が「商品価値の無概念的な形態」（〔本分冊，〕272ページ）として現われる。利潤および地代では剰余価値の源泉はすでに覆い隠されており，利子生み資本では資本は利子の神秘的かつ自己創造的な源泉としてさえ現われ，利子は資本の絶対的な外化として，すなわち「最高の展相における生産諸関係の転倒と物象化」（〔本分冊，〕462ページ）として現われるのである。そのさいマルクスは，物象的な外観にとらわれた思考を物神崇拝という概念で呼び，資

本の実現の諸条件を覆い隠す資本のそのような現われ方を神秘化の名で呼んだ。資本主義的生産諸関係の実践が物象化を再生産し，外観諸形態を生みだし，本質を神秘化するからこそ，マルクスは脱物神化を科学の恒常的な課題だと考えていた。彼が最終章のなかで，三位一体的定式と批判的に対決し，資本主義的競争の外観に関する諸命題を定式化し，生産と分配との関係に関する諸命題を定式化したのは，このような意味においてであった。

予定されていた「諸階級」に関する章は，若干の段落が書かれたのち，とぎれている。

成立と来歴

第3部のこの草稿は『資本論』の第3草案の一部として成立したものである。この草稿は完全なかたちで残されている。草稿『経済学批判(1861−1863年)』〔『1861−1863年草稿』(『資本論草稿集』④−⑨)〕の仕事を終りにしたあと，マルクスは，これからしなければならないのは印刷のために清書をして最終的に推敲すること，つまりこの著作の「最後の仕上げ」をすることだと考えた（1863年5月29日付のエンゲルスあてのマルクスの手紙〔MEW, Bd.30, S.350〕，および同年8月15日付のエンゲルスあてのマルクスの手紙〔MEW, Bd.30, S.368〕を見よ)。明らかに彼は，理論的な部分——つまり三つの部，すなわち「資本の生産過程」，「資本の流通過程」，「総過程の諸形象」——を，ひとまず完全に書きあげ，それからその全部を刊行したいと考えていたのである。

ハンブルクの出版業者オットー・マイスナーとの契約では，マルクスははじめ，完全原稿を遅くとも1865年の5月までに渡すはずの約束をしていた。こうした前提のもとで，マイスナーは，遅くとも10月までにこの著作の全体を出荷したいと考えていた（『カール・マルクス氏と書籍出版業者オットー・マイスナーとのあいだの取り決め』，『労働運動史研究〔Beiträge zur Geschichte der Arbeiterbewegung〕』，1967年度第5分

冊，843 ページを見よ)。結局彼は，1865 年 3 月 21 日付でマルクスに，「ご要望の変更を加えた諸契約」を送ることになった。彼はこれについて次のように書いていた。「私は，原稿をお引き渡しいただくべき時機を失してしまいました。どうか，印刷を始めるのが年内のあまりに遅い時期にならないように，最善を尽くされますようお願いいたします。と申しますのも，そうしていただかなければ，1866 年になる前に貴著を上梓することができないからです。」〔この新たな契約で〕全 3 部が，同時に出される 2 巻本として，すなわち第 1 部と第 2 部とが第 1 巻として，第 3 部が第 2 巻として刊行されることになった（1866 年 1 月 15 日付のヴィルヘルム・リープクネヒトあてのマルクスの手紙〔MEW, Bd.31, S.497〕，および 1866 年 10 月 13 日付のルイ・クーゲルマンあてのマルクスの手紙〔MEW, Bd.31, S.534〕を見よ)。〔この契約での〕もう一つ別の変更は，明らかにこれらの巻の総分量に関わるものであって，それは 50 全紙から 60 全紙に引き上げられたのである。

1864 年夏から 1865 年 12 月にかけてのマルクスの自己了解のあり方に影響を与えることになったこれらの決定には，いくつかの重要な根拠があった。たとえば国際労働者協会の創設は，『資本論』をできるだけ早く刊行して，産業的に発達した資本主義諸国の労働運動のなかでそれを効果的に普及する必要を際立たせた。同様に，基本的な輪郭や重要な個別的論点ではすでに仕上げられていた資本主義の分析および批判を，包括的なかたちにおいても詳述することが望ましいように思われた。「しかしぼくは，全体が目の前にできあがっていないうちに，どれかを送りだしてしまう決心がつきかねるのだ。たとえどんな欠点があろうとも，ぼくの著書の長所は，それが一つの芸術的な全体をなしているということなのだ。そしてそれは，ただ，全体が目の前にできあがっていないうちはけっして印刷させないというぼくのやり方によってのみ，達成できるのだ」(1865 年 7 月 31 日付のエンゲルスあてのマルクスの手紙〔MEW, Bd.31, S.132〕)。マルクスは，マイスナーと取り決めた 60 印刷全紙という最高限界を考慮して，

このやり方はまた，「定められた限界のなかで個々の部分を均整で釣り合いのとれたものにするためにはどれだけ圧縮し削除すればよいかを知るために……どうしても必要」（1965年8月5日付のエンゲルスあてのマルクスの手紙〔MEW, Bd.31, S.134〕）だと考えていた。とりわけこの過程で肝要だったのは，すべての部に当てはまる最終的な区分を，すなわち，章や節への篇別構成を作りだすことであった。

第3部については，それを執筆するのに利用できる若干の有力な前提が存在していた。第3章「資本と利潤」（MEGA②第2部第3巻第5分冊，1598−1692ページ〔『資本論草稿集』⑧，87−221ページ〕）という姿で，剰余価値の利潤への転化，ならびに，利潤の平均利潤への転化を論じている一つの理論的試論が手もとにあった。「剰余価値学説史」（MEGA②第2部第3巻第2分冊－第2部第3巻第4分冊〔『資本論草稿集』⑤－⑦〕，および，MEGA②第2部第3巻第5分冊，1773−1888ページ〔『資本論草稿集』⑧，381−585ページ〕を見よ）におけるブルジョア経済学の批判的考察から得られた，平均利潤と生産価格に関するもろもろの認識，ならびに，剰余価値の転化諸形態に関する，すなわち，産業利潤および商業利潤，利子，絶対地代および差額地代，に関するもろもろの認識があった。この認識は「収入とその諸源泉」という総括的な一挿論で終わっていた。「商業資本。貨幣取扱業に従事する資本」というテーマについての一つの論述（MEGA②第2部第3巻第5分冊，1545−1597ページおよび1682−1773ページ〔『資本論草稿集』⑧，5−85ページおよび222−379ページ〕）が目の前にあった。主としてこれらの分析の結果として資本主義的生産の総過程の叙述が生まれたのである。書き上げていく過程そのもののなかで，マルクスは『1861−1863年草稿』からの少なからぬ章句をこの原稿に転用した。このことは，なによりも，第1章での剰余価値と利潤についての，第3章での平均利潤率の傾向的低下の法則についての，ならびに第4章と第5章の最初の諸項目とでの商人資本ならびに利子生み資本についての基本的な諸論述について言える。

第3部のために構想上の基礎として役立ったのは，1862年12月に作成された第3篇「資本と利潤」のためのプラン草案（MEGA②第2部第3巻第5分冊，1861ページ〔『資本論草稿集』⑧，541ページ〕）である。マルクスは，彼の主著の第2草案の仕事をしているあいだはまだ「篇〔Abschnitt〕」として，または時には「章〔Kapitel〕」として計画していたものを，彼はいまでは「部〔Buch〕」と呼んだ。

プラン草案	第3部の篇別構成
「1）剰余価値の利潤への転化。剰余価値率と区別される利潤率。	「第1章　剰余価値の利潤への転化。
2）利潤の平均利潤への転化。一般的利潤率の形成。価値の生産価格への転化。	第2章　利潤の平均利潤への転化。
3）利潤および生産価格に関するA・スミスおよびリカードウの学説。	
4）地代。（価値と生産価格との相違の例証。）	
5）いわゆるリカードウ地代法則の歴史。	
6）利潤率の低下の法則。A・スミス，リカードウ，ケアリ。	第3章　資本主義的生産の進歩における利潤の傾向的低下の法則。
7）利潤に関する諸学説。……	
8）産業利潤と利子とへの利潤の分裂。商業資本。貨幣資本。	第4章　商品資本および貨幣資本の商品取扱資本および貨幣取扱資本への転化。
	第5章　利子と企業利得とへの利潤の分裂。（産業利潤と商業

9）収入とその諸源泉。生産過程と分配過程との関係に関する問題もここに取り入れること。
10）資本主義的生産の総過程における貨幣の還流運動。
11）俗流経済学。
12）結び。「資本と賃労働」。」

利潤。）利子生み資本。
第6章　超過利潤の地代への転化。
第7章　諸収入（諸所得）とその諸源泉。」

プラン草案には若干の重要な変更が加えられなければならなかった。第1にマルクスは，彼が『資本論』に，ブルジョア経済学の歴史についての別の一つの部〔第4部〕を添えようという，基本にかかわる決心をしたこととの関連で，はじめの構想とは異なり，各章ごとに歴史的・文献的な論述をつけることをやめた。これらの論述については，第3部の草稿のなかでもいくたびか触れられている。この草稿では，それらはたいてい「のちの歴史的諸章」と呼ばれ，さもなければ，続いて書かれるべき第4部の諸部分と呼ばれている。それだから，プラン草案を実現するときには，その項目の3，5，7，11が無視されたのである。このやり方は，すでに1863−1864年執筆の第1部の草案でもとられていたのであって，この草案もまた，そのプランとは逆に，学説史的な余論を含んでいない。この草案の最後の章である第6章のなかの一つの覚え書が，マルクスがそのような一つの部を考えていたことを明示的に証明している。そこでは，総生産物と純生産物との区別に結びついている，伝統的に混乱したもろもろの観念は，一部は「重農学派（第4部を見よ）」に由来するものだ（MEGA②第2部第4巻第1分冊，118ページ〔『直接的生産過程の諸結果』，大月書店，1970年，128ページ〕），と述べられているのである。1865年7月31日付

のエンゲルスあての手紙のなかで，マルクスは最終的に，そのようにすることを次のように書き表わした〔MEW, Bd.31, S.132〕。「それからさらに第4部，つまり歴史的・文献的な部を書かなければならないのだが，これらはぼくにとっては相対的に最も容易な部分だ。というのは，問題はすべてはじめの三つの部のなかで解決されていて，この最後の部はむしろ歴史的な形態での繰り返しだからだ。」第3部の草案の第6章には，さらにもう一つ，この計画されていた部への明示的な指示が書き込まれた（〔本分冊,〕724ページを見よ）。

第2にマルクスは，第3部そのものの構成を修正した。たとえば彼は，利潤および平均利潤に関する諸章のあとに，はじめ考えていたのとは異なり，「例証」としての地代に関する章ではなく，平均利潤率の傾向的低下に関する章を書いた。マルクスがすでに『1861−1863年草稿』のなかで確認していたように，ここで問題になっているのは，産業諸資本によって構成される総資本の価値増殖度の発展傾向をあらわにするような法則である。それにたいして彼は，さまざまの資本家グループのあいだへの社会的剰余価値の分配を二次的な操作だと考えていたのであり，だから，叙述方法としては，こうした分配はこの法則のあとではじめて論じることができる，と書いていた（MEGA②第2部第3巻第5分冊，1632−1633ページ〔『資本論草稿集』⑧，143−144ページ〕を見よ）。いまではマルクスはさらに，この法則が，それが一般的なものである点で，はじめからさまざまな部分への利潤の分裂から独立していることを力説した（〔本分冊,〕288ページを見よ。またMEGA②第2部第4巻第1分冊，225ページ〔『資本の流通過程』，108ページ〕をも見よ）。この考えは，第3部の三つの基本的な章の執筆によってはじめて首尾一貫して実現されたのであって，これらの章に引き続いて，利潤および地代の諸形態があますところなく叙述された。

絶対地代はすでに『1861−1863年草稿』のなかで，一方では，価値の生産価格への転化についての学説から導出されるものとして展開されてお

り，それは同時に，この学説が正しいことを示す試金石でもあった。他方では，獲得されたこのような認識水準が，マルクスに，絶対地代をこの学説と並べて叙述することを決心させた。エンゲルスあてのある手紙ではこう書かれていた。「ところが，いまぼくがもくろんでいるのは，すぐにこの巻のなかで地代論を，1章を設けて，すなわち以前に立てた一つの命題の「例解」として，持ち込むということだ」(1862年8月2日付のエンゲルスあてのマルクスの手紙〔MEW, Bd.30, S.263〕)。ここで言う「命題」とは，平均利潤および生産価格として概念化されていた，資本主義的競争に関わる基本的なもののことである。そのあと第3部の草案では，絶対地代はもはや「例証」として考えられるのではなくて，もっと包括的に，資本主義における土地所有に関わる本質的なものを表現するようなしかたで考察された。とりわけ，資本主義的生産の総過程の叙述のなかで，さらに差額地代が考察されたのであって，このことは，いまや全体のなかでこの二つの地代形態が，相対的に自立した重要な位置を占めていることを意味している。第6章そのものを執筆するさいマルクスは，「緒言」のあと，まず絶対地代に取り組み，そのあとではじめて差額地代に取り組んだ。けれども，彼がはじめから知っていたように（〔本分冊,〕690ページを見よ），さらにまたこの章のための一つの詳細なプランが確証しているように（〔本分冊,〕816−817ページを見よ），最終的な叙述では——つまり印刷用原稿では——，土地の資本主義的耕作を表わす物象的表現としての差額地代が，まずはじめに論じられるはずであった。最終的な叙述がなされたなら，資本関係の研究に当てられる最終章「資本と賃労働」が書かれることができたかもしれない。しかし，結局のところマルクスは，この章の対象をもっと広く把握しなければならなかった。彼の主著では，三つの階級の，すなわち資本家，土地所有者および賃労働者の経済的な諸連関を暴くことが肝要だったのである。

総体としての生産と分配との弁証法的統一を論じている第7章のなかでは，叙述の方法に従って，これらの連関は綜合されており，経済的諸関係

がブルジョア社会の諸表層で現われている物象的外観は廃棄されている。諸階級に関する論述は未完のままに残された。明らかにマルクスはこの論述で，資本主義的生産様式の「解体」を，ブルジョア社会の克服にまで到るべき階級闘争として論じるつもりであった（1868年4月30日付のエンゲルスあてのマルクスの手紙を見よ〔MEW, Bd.32, S.75〕）。

商人資本の考察と利子生み資本の考察は，プラン草案の第8の項目で計画されていたのとはちがって，一緒になされるのではなく，別個に分けて，つまり第3部の第4章と第5章とでなされた。第2章を書いたときは，マルクスは次のように注記していた。「{けれども，この種の資本」——利子生み資本のことを言っている——「が，商業資本一般がそうであるように，別個に論じられなければならないことは，次の項目でわかるであろう。}」（〔本分冊,〕228ページ。）また第2部の「第1稿」にも，第3部第4章が利子生み資本を扱うだろう，という記述がある（MEGA②第2部第4巻第1分冊，360ページ〔『資本の流通過程』，275ページ〕を見よ）。この第4章の表題のなかの文言の変更は，同じく構想についてのマルクスの熟慮がさらに進んだことを反映している（〔本分冊,〕341ページ2–4行への異文を見よ）。この章は，はじめは，もっぱら利子生み資本を含む予定であった。結局，インクでなされた表題の変更が証明しているように，マルクスは商人資本と利子生み資本とを一つの章で論じようと考えた。この二つの資本形態の順序が変えられたことも注目に価する。けれども，商人資本の叙述が終りに近づいたときにマルクスは，もう一つの形態をも，一つの独立の章を設けてそのなかで論じることに決めた。つまり，277ページで次のように言っているのである。「しかしこの点については，われわれは利子生み資本は次の章ではじめて展開するのだから，あとではじめて論じよう」（〔本分冊,〕391ページ）。最終的な文言を確定した表題のこの変更は鉛筆で行なわれたものなので，それはもしかすると，あとで目を通したときにはじめて行なわれたのかもしれない。

貨幣流通については，マルクスはすでに第2部の「第1稿」で，若干の

規定，しかも単純な貨幣通流を表現するような諸規定を与えていた。この草稿で彼はまた，「商人資本等々，ならびに，剰余価値が分裂していくさまざまの特殊的範疇が考察されたのちに，第3部の最後の章で」――明らかに「10）　……貨幣の還流運動」で――これより進んだ諸規定が展開されるであろう，という覚え書きを記していた（MEGA②第2部第4巻第1分冊，305ページ〔『資本の流通過程』，201ページ〕）。それらの規定は，貨幣流通の背後に隠されている過程，つまり「相互に絡み合った生産，消費，分配，流通および再生産の諸契機を含んでいる再生産過程の総循環」（カール・マルクス『経済学批判』，MEGA②第2部第3巻第5分冊，1706ページ〔『資本論草稿集』⑧，254ページ〕）をあらわにするはずのものであった。マルクスが『1861−1863年草稿』の「挿論。資本主義的再生産における貨幣の還流運動」での立ち入った分析にもとづいてこのように輪郭を描いた（同前，1701−1746ページおよび1750−1760ページ〔『資本論草稿集』⑧，246−328ページおよび337−355ページ〕）のは，明らかにこの章の対象であった。彼はこの第3部草稿のためにそのような章を書くことをしなかったけれども，基本的なものは第4章のなかに取り入れられた。

草案の最後の二章は，これらに特有のしかたで成立した。マルクスは第7章を，第6章の仕事をまだ終えないうちに書いたのである。だからまた彼は，この章にはページづけをしなかった。第6章からの若干のページが第7章に借用された。マルクスは第7章の冒頭で，表題「第7章。諸収入（諸所得）とその諸源泉。」のあとに，「1.　三位一体的定式。（この部の445，446ページを参照）（その箇所はここに置かれるべきものである。）」（〔本分冊，〕834ページ）と書いた。445ページ（〔本分冊，〕720ページ30行目−722ページ2行目）には，角括弧に入れられた三位一体的定式に関する岐論がある。（エンゲルスはこの岐論を，刊本〔1894年のエンゲルス版〕では第2分冊の349ページ以下に，Ⅲという見出しをつけて再現している〔MEW, Bd.25, S.825−839ページ〕。）けれども，446ページにはこのテーマについての記述はまったくない。おそらく，マルクスは446ペー

ジで始まる全紙を取りのけて，第7章のために使ったのであろう。マルクスは，第7章の最初の全紙の直後に，彼が〔その表裏に〕470および471というページ番号をつけた1枚の紙（〔本分冊,〕840ページ32行目−845ページ16行目）を挿入した。471ページの本文はすぐに次の全紙の本文に続いている。けれどもエンゲルスは，のちに第7章をページづけしたとき，この両ページをマルクスが置くつもりであった箇所に組み入れないで，ⅠおよびⅡとして第7章のはじめに置いた〔MEW, Bd.25, S.822−825〕。彼がⅢとしてもってきたのは445ページの岐論である。エンゲルスは，彼が531および532というページ番号をつけた二つのページのあいだに，刊本〔1894年のエンゲルス版〕では第2分冊の358ページ〔MEW, Bd.25, S.831〕に，「〔ここには二つ折全紙1枚の草稿が欠けている。〕」と注記した。のちにこれらのページ〔470ページと471ページ〕には，531aおよび531bというページ番号がつけられた。

『資本論』の第3部は，数か月にわたる中断をはさむ二つの段階で成立した。マルクスはこの中断の時期，つまり1865年の前半のあいだに，第2部の草案と講演『価値，価格，利潤』（MEGA②第2部第4巻第1分冊，560−568ページ〔第2部第1稿の「成立と来歴」〕および685−688ページ〔『価値，価格，利潤』の「成立と来歴」〕を見よ）を書いたのである。彼は第3部の草案の仕事を，第2章の執筆で開始した。その理由はたぶん，『1861−1863年草稿』のノート第17冊では利潤の平均利潤への転化がまだ包括的には仕上げられていなかったことにあったのであろう。その当時マルクスはこの問題に，競争についての特論ではじめて立ち入るつもりだったのである（MEGA②第2部第3巻第5分冊，1623ページ〔『資本論草稿集』⑧，129ページ〕を見よ）。第2章に使われた二つ折全紙の一枚ごとに，まず，鉛筆で「a)」から「l)」までのラテン文字での標識が書かれた。このページづけは，のちに第1章の執筆ののち第3章の執筆のまえに，インクでの通し番号によるページづけと取り替えられた。

いま述べた中断を示唆しているのは，第1章での叙述のなかに見られる

一つの欠落部分であって，これは資本回転が利潤率に及ぼす影響にかかわるものである。この箇所に見られるのは，表題「[6)] 流通時間の変化つまり短縮または延長（同じくそれと結びついた交通手段）が利潤率に及ぼす影響」（〔本分冊,〕208ページ）だけである。この欠落部分をたえず意識していたマルクスは次のように記している。「流通時間が利潤率にどの程度の影響を及ぼすかということは，われわれがここでは細目に立ち入るつもりのない問題〔に属する〕（というのは，このことが本格的に論じられる第2部がまだ書かれていないからである）」（〔本分冊,〕225ページ）。第2部で彼は，剰余価値率の詳しい一規定，つまり剰余価値の年率としてのそれの規定を展開した。マルクスはこの規定を，年利潤率の叙述のための基礎だと解していた（MEGA②第2部第4巻第1分冊，245ページ〔『資本の流通過程』，130ページ〕を見よ）。彼が資本の回転に取り組んでいたときには，彼はまだ，「利潤のところで正しい考察を行なうために」，固定資本が剰余価値の率と量との形成に及ぼす影響を厳密に研究しなければならない，と書いており，またさらに，「（ここでついでに論じられる利潤率は第3部第1章のためのものである）」（MEGA②第2部第4巻第1分冊，266，262ページ〔『資本の流通過程』，156，150ページ〕），と書いていた。叙述の論理によって，結局マルクスは，当該の欠落部分を埋めることを，それゆえに第3部の執筆を中断してまず第2部を仕上げることを強制されたのである。ただし彼はそのとき，第3部の第1章をそれに応じて補うことはしなかった。草稿の182ページには，まだ，「{市場の概念は，最も一般的なかたちでは，資本の流通過程に関する項目で展開されなければならない}」（〔本分冊,〕255ページ），という覚え書きがある。「展開されなければならない」というこの言い回しは，第3部のある一部分が――まずまちがいなく最初の三つの章が――第2部の執筆のまえに書かれたことを示唆している。

第4章とそれ以降のすべての章が第3部の草案の第2の作業段階で成立したことは確実である。まず，243ページと256ページとに見いだされ

る，第2部の第1章のなかの「3）　流通費」という節への言及（〔本分冊,〕342ページおよび361ページを見よ）がこのことを証明している。これらの言及は，〔第2部の〕「第1稿」の執筆のあとではじめて立案されたこの部のためのプラン（MEGA②第2部第4巻第1分冊，139ページ〔『資本の流通過程』，8ページ〕を見よ）に一致しているものである。〔第2部第1稿の〕草稿そのもののなかでは，流通費はまだ第4節として書かれているのである（同前，222ページ〔『資本の流通過程』，105ページ〕を見よ）。さらにまた，第4章のための表題の文言の変遷が，このような執筆の経過を示唆している（〔本分冊,〕341ページ2-4行への異文を見よ）。マルクスは，商人資本および利子生み資本を，もはや一緒に一つの章のなかで論じるのではなく，別個に，独立した二つの章で論じることを決心したのである。第2部の執筆から得られたもろもろの認識がすでにこの変更の根拠となっていたのかもしれない。剰余価値を生産する諸資本のあいだの競争戦のもろもろの基本的な法則性を論じている，草案の最初の三つの章を書いたのちに，マルクスが直面したのは，特殊的，派生的な資本諸形態の叙述は生産資本の諸変態の叙述からどのようにして厳密に区切られるべきか，両者のあいだの諸移行は個々的にはどのような姿態をとるのか，という問題であった。この問題の解決は，資本の流通過程の分析を前提していた。最後に第3部で展開されているような諸資本の現実的運動を論じることができるようになるまえに，まずもって，諸資本のそのような自立化の可能性が――つまり諸資本の形態的運動が――表現されなければならなかった。そのさいに，商人資本と利子生み資本とは二つの質的に異なる自立的な資本形態だ，という認識が固まったのであって，このことが，この両形態を別個に叙述することを要求したのである。

このような執筆の経過は，利用された紙種からも立証される。第3部の最初に書かれた第2章のあと，それに続けて執筆された第1章と第3章とのためにマルクスが使用した二つの紙種――第2紙種と第4紙種――は，第1部の最後の章である第6章のために彼が使用したのと同じ紙種であ

る。他方で，第4章と第5章との執筆に使われた第3部の第5紙種は，明らかに，マルクスが第2部で使った31枚の二つ折全紙と同じ紙種である。

草稿の執筆時期について

第1部を書き終えたのちマルクスは第3部に，それもまずはその第2章に向かったが，この時期を推定する手掛りとなるものはなにもない。彼がそのあとで成立した第1章の執筆を終えたのは1864年10月中であるが，もしかすると11月初旬になってようやく終えたのかもしれない。というのは，135ページに「(いま，'64年10月，新たな恐慌にある)」(〔本分冊,〕204ページ）と書かれているからである。その数ページあとでは，綿花恐慌が労働者の状態に及ぼした影響が問題となっている。そこでマルクスは，失業した工場労働者の扶助のために徴収された税金のうちの相当な部分が彼らの手に帰していないこと，公的労働に投入されたプロレタリアたちが飢餓賃銀しか受け取っていないのに，他方でブルジョアジーはそこから高い利潤を引きだしていることを確認した。11月14日にマルクスは，この件についての情報を提供している11月8日付の『マンチェスター・ガーディアン』紙を知らせてくれたエンゲルスに礼を述べた。彼はこう書いていた〔MEW, Bd.31, S.21-22〕。「『ガーディアン』からの君の言う事実はぼくには非常に重要だ。ぼくはこの卑劣行為を工場報告書からすでに集めていたのだが，それはただ苦労しながら断片的にでしかなかったのだ。」これによれば，マルクスは第3部の執筆を，たぶん1864年の夏に，おそらくは，7月23日ごろから8月10日までのラムズギットでの休暇滞在のあとに始めたのであろう。

明らかに，第3章は第2部の執筆のまえに，第4章はそれのあとに書かれた。マルクスは1865年7月から12月までのあいだ第5，6，7章に取り組んだ。7月31日付のエンゲルスあての彼の手紙のなかには次のように書かれている〔MEW, Bd.31, S.132〕。「理論的な部分（はじめの三つの部）を完成するためには，まだ三つの章を書かなければならない。」8月

19 日付のエンゲルスあての手紙からは，マルクスが「銀行制度……に関する 1857 年および 1858 年の議会報告書を……最近もう一度調べてみなければならなかった」〔MEW, Bd.31, S.145〕ことが分かるのであり，しかもこの分析は，第 5 章の構成部分なのである。最後に，第 5 章の最終ページには，「いま（1865 年10月）」（〔本分冊,〕664 ページ）という注意が含まれており，それに加えて 1865 年 10 月 11 日付のイングランド銀行の報告書からの一つの引用が含まれている。第 6 章をマルクスが書き始めたのは 12 月の中旬であった。このことは，415–416 ページに引用されている，ジョン・ブライトが 12 月 13 日にバーミンガムで行なった演説の章句（〔本分冊,〕683–684 ページ）を，マルクスが 12 月 14 日付の『モーニング・スター』紙から取ったことから推定される。マルクスはこの部を 1865 年 12 月に書き終えた。「それは 12 月末にできあがった」とマルクスはエンゲルスに 1866 年 2 月 13 日付の手紙で知らせた〔MEW, Bd.31, S.178〕。

第 6 章の 452 ページに，終わったのがもっとあとであったことを示唆するような覚え書きがある。マルクスは，「現在は，10 年前と比較すれば」を「1866 年は，1846 年と比較すれば」に変更した（〔本分冊,〕729 ページ 10–11 行への異文を見よ）のであり，したがって，もしかすると，1866 年 1 月にはまだ彼は，草案のうちの彼が最後に執筆した第 6 章の仕事についていたのかもしれないのである。というのも，すでに立証したように，第 7 章は第 6 章の一部分と並行して成立したのだからである。けれども，それよりも公算が大きいのは，この覚え書きが刊行を見越して書かれたものだということである。いずれにしても，マルクスはエンゲルスにたいして，「きっかり 1 月 1 日に」第 1 巻の清書を開始した，と言明した（1866 年 2 月 13 日付のエンゲルスあてのマルクスの手紙〔MEW, Bd.31, S.179〕）のであり，また，そのほかのいくつかの手紙からは，彼が 1 月に集中的にこの清書の仕事に取り組んでいたことがわかるのである（1866 年 1 月 15 日付のルイ・クーゲルマンあてのマルクスの手紙〔MEW, Bd. 31, S.496〕，および 1866 年 1 月 24 日付のジークフリート・マイヤーあて

のマルクスの手紙〔MEW, Bd.31, S.499〕を見よ)。

補足的な諸研究

マルクスは，彼の主著の草案を1865年9月1日までには「ちゃんとできあがっている」(1965年5月9日付のエンゲルスあてのマルクスの手紙〔MEW, Bd.31, S.117〕を見よ）ようにすること，つまり，それまでに第3かつ最後の部を仕上げることをもくろんでいた。国際労働者協会の総評議会の委員としての彼のもろもろの責務，病気によって引き起こされた度重なる中断，そして第1章を，しかしとりわけ第5，6章を，充実させ完成させるための時間のかかるもろもろの研究が，終結をさきに延ばすことになっていった（1866年1月15日付のヴィルヘルム・リープクネヒトあてのマルクスの手紙〔MEW, Bd.31, S.497〕を見よ)。マルクスがのちに述べたように，「もともとはあらゆる研究がもっている……荒削りの形態」(1877年11月3日付のジークムント・ショットあてのマルクスの手紙〔MEW, Bd.34, S.307〕）が，「剰余価値学説史」にとってもそうであったのとまったく同様に，第3部の草案にとって特徴的なことであった。このことを映しだしているのは，『資本論』の第1巻の1867年の版についてもそうであったように全体の項目編成がほとんど細目化されていないこと，叙述に欠落や欠陥があること，学説史的・経験的材料のあちこちで最終的な手入れがなされていないことである。けれども，草稿の理論的内容と内的構造とは主要な点においてすでに与えられていたのであって，草稿のそのような性格を決定的につくりあげたのは，もろもろの新たな研究であった。

なによりもまずマルクスは第1章の範囲内で，「……不変資本充用上の節約」と「不変資本の価格変動の影響……」(〔本分冊,〕46ページ。〔本分冊,〕114−115ページをも見よ）とについて，またさらに「資本の遊離と拘束，減価と増価……」(〔本分冊,〕178ページ。〔本分冊,〕167−169ページをも見よ）について詳論しようと考えていたのであって，このこと

はいくつかの事例で確実に証明される。この考えは，すでに『1861−1863年草稿』の最終の作業段階で熟していたものである（MEGA②第2部第3巻第6分冊，2163−2166ページ〔『資本論草稿集』⑨，415−419ページ〕を見よ）。最終的には，この叙述は多彩な事実材料の分析と結びつけられていた。マルクスはこの材料を，とくに『……工場監督官報告書』のなかに，とりわけ1856年から1864年までのあいだに出版されたそれのなかに，『〔製パン職人の苦情に関する〕枢密院内相あての報告書』，ロンドン，1862年，のなかに，また『公衆衛生。第6次……報告書』，ロンドン，1864年，のなかに見いだした。このことが示しているのは，彼にとって，イギリスのプロレタリアートの労働条件や生活条件に関する諸事実が，資本主義批判の「例証」としていちだんと重要性を増していた，ということである。ポール・ラファルグが述べたところでは，マルクスは，これらの政府監督官庁の刊行物を購入して，「彼がそのなかに書き込んだ無数の鉛筆の線が証明しているように」それらを初めから終りまで読んだのであって，「彼はこれらの資料を資本主義的生産様式の研究のための最も重要で最も意義ある資料のなかに数え，そして」それらの著者である工場監督官たちを「……高く評価していた」（ポール・ラファルグ「カール・マルクス。個人的な思い出」，『ノイエ・ツァイト』，シュトゥットガルト，第9年度刊，1890−1891年，第1巻，17ページ〔『モールと将軍』，大月書店，1976年，307ページ〕を見よ）。もしかすると，マルクスが『……報告書』を入手したのは，ちょうど1863−1864年だったのかもしれない。彼が第3部の第1章を書いていた1864年10月に彼がこれらを所蔵していたことは明らかである。マルクスは，この10月の後半には，主として国際労働者協会の創立宣言ならびに規約の起草や国際労働者協会の講演や議論に携わっていたが，11月の前半にはフルンケル症に苦しんでいたのであって，そのためこの間は家を出て大英博物館で仕事をすることができなかった。その結果，材料の分析と組み合わせは大英博物館で行なわれることができず，草稿へのすべての引用は，むしろじかに，彼の蔵書のなかにあった

『……報告書』から取られなければならなかったのである（1864年11月14日付のエンゲルスあてのマルクスの手紙〔MEW, Bd.31, S.21〕を見よ)。マルクスは工場監督官たちの説得力ある諸資料を利用しはしたが，さきに挙げた諸節の最終的な仕上げや体系化は行なわれなかった。

第5章については，なによりもまず注目に価するのは，マルクスが，『ロンドン・ノート，1850−1853年』で獲得していた認識とデータとに著しく手を加えたことである。注解のなかで詳細に示されているように，この章は，信用のほとんどすべての側面と，資本主義的生産様式の機能メカニズムのなかで信用が果たす役割とに関説している。この章はそのほかに，352a−352jページ（〔本分冊,〕561−583ページ）に，「混乱」という表題をもつ，批判的なコメントがつけられた材料集録を含んでいる。エンゲルスが述べたように，それは，「1848年と1857年との恐慌に関する議会報告書からの抜き書きだけであって，そこでは，ことに貨幣と資本，金流出，過度投機などに関する23人の実業家や経済評論家の陳述がまとめられており，あちこちにユーモラスな寸評が加えられている」。「貨幣と資本との関係について当時行なわれていたほとんどすべての見解が……代表されて」おり，「貨幣市場ではなにが貨幣でなにが資本であるかということについての「混乱」がここで明るみに出ている」（フリードリヒ・エンゲルス「序文」。カール・マルクス『資本論』，第3巻第1分冊，フリードリヒ・エンゲルス編，ハンブルク，1894年，Ⅷページ〔MEW, Bd.25, S.13〕)。これらの研究にはそれの続きが360−392ページ（〔本分冊,〕567−646ページ）にあって，これらのページはその大部分が，これまた，恐慌に関する次の4つの浩瀚な議会報告書の分析から生まれたものであった。すなわち『商業的窮境に関する秘密委員会第1次報告書……1848年6月8日印刷』，『窮境の原因……の究明のために任命された上院秘密委員会報告書……1848年7月28日印刷（1857年重刷)』，『銀行法特別委員会報告書……1857年7月30日印刷』，『銀行法特別委員会報告書……1858年7月1日印刷』である。これらの研究はそのほかに，それ以外の諸典拠から

の統計資料ともろもろの理論的な文言を含んでいる。マルクスが関心をもったのは，産業循環のなかでの貸付資本の運動と利子率の運動，銀行券と貨幣金属——金および銀——の流通，イギリスにおけるこれらの金属の輸出入，そして為替相場であった。意識のなかでは，これらの細目をある種のしかたではじめて体系化することが行なわれた。それでもなお，この部分は「混乱」がもつのと同様の性格を帯びているのであって，この両者はじっさい材料集録なのである。このことは，次のような外形からも確認される。352a−352j のすべてのページと 360−392 の大部分のページは，完全に——ページの上から下まで通して——マルクスによる引用，統計，批評的な傍注で満たされている。これは草稿の他の諸部分とは対照的であって，他の部分では，ページが半分に区切られ，上半に本文が，下半に脚注が書かれたのである。全体ができあがった直後に，マルクスはエンゲルスにたいして次のように述べた。「銀行制度に関する 1857 年と 1858 年の議会報告書等々，これらをぼくは最近もう一度吟味してみなければならなかったのだが，これらのなかに見いだされるまったくのナンセンスについては，君にもとうてい想像がつかないだろう」（1865 年 8 月 19 日付のエンゲルスあてのマルクスの手紙〔MEW, Bd.31, S.145〕）。この材料集録をもたらした研究過程はたしかに叙述の進行を中断したが，それにもかかわらず，それは体系的なものの執筆と結びつけられていたか，あるいは体系的なものを補足したのである。

利子生み資本の分析は，はじめ，剰余価値理論の叙述の有機的な一部をなし，資本の核心構造の特徴づけに必要な，わずかの決定的な観点だけを含むはずのものであった。この意味で，利子生み資本，利子と企業利得とへの利潤の分割，そして利子生み資本の運動形態としての信用を解明することにマルクスは専念した。「信用制度とそれが自分のためにつくりだす，信用貨幣などのような諸用具との分析」（〔本分冊，〕469 ページ）は，彼のプランの範囲外にあるのであって，彼は，信用の諸現象を細目にわたって研究することはしない，と述べている（〔本分冊，〕431 ページを見よ）。

この作業段階の頂点は，エンゲルスがのちに「資本主義的生産における信用の役割」という表題をつけた一つの総括であった。マルクスにとってはそれは，「信用制度についてこれまでわれわれが一般的に述べる機会をもったこと」（〔本分冊,〕501ページ）であった。次の作業段階では，彼は信用のもろもろの基本問題について，同様に集中的研究を継続した。これらの研究は，第1に，すでに書かれていた諸節を経験的な材料によって豊富化することになった（〔草稿,〕319−325bページの［追補］（〔本分冊,〕476−500ページ）を見よ）のであって，あるいはこのことが，さしあたってこれらの研究をうながした唯一の原因だったのかもしれない。

それらの研究は，第2に，必然的にテーマの拡張を伴った。マルクスは，流通手段と利子生み資本との区別を論じたのち，信用の特有の諸問題に，信用の立ち入った考察に向かった。マルクスは，貨幣資本ないし銀行資本の性格および構成諸部分を論じ，架空資本を論じ，また貨幣資本の蓄積と現実的蓄積との関連を論じた。そのあと彼の注意は，産業循環のなかで機能する利子生み資本に向けられた。すなわち，いまや，産業家と商人とによってなによりも恐慌期に要求される商業信用および銀行信用は，彼の関心を引くことが少なくなり，彼はむしろ，一時的に遊休している資金を拡大再生産つまり資本の蓄積過程のために動員することとして展開される貸付資本に関心を寄せたのである。マルクスは，イギリスにおける銀行立法の基本的役割を詳細に検討したが，これは，その具体性の点で，明らかに『資本論』の対象を越え出るものである。注目に値するのは，項目Ⅰ），Ⅱ），Ⅲ）での叙述（〔本分冊,〕506−561ページおよび584−597ページを見よ）が，さきに見た経験的・学説史的な記述にもとづいてなされているということ，つまり事実のこの集録・分析はこれらの項目の執筆よりもまえに行なわれたのだ，ということである。このことは，もろもろの理論的説明からわかるだけでなく，さらにまた特定の引用そのものが第5章のこのような成立の経過を確証している。たとえば328ページ（〔本分冊,〕505ページ）では，トマス・トゥック，ジェイムズ・ウィルスンそ

の他の見解に言及されているが，マルクスが，352a−352j ページで抜萃されていた彼らの文言のことを考えていたことはまったく明白である。330 ページ（〔本分冊,〕510 ページ）は，あるリヴァプール銀行理事の証言への関説を含んでいるが，マルクスが，370 ページ（〔本分冊,〕617 ページ）で引用されていた証言のことを言っていたことは確かである。結局この材料集録は第 5 章のなかにはめ込まれたのであるが，これは実際のところ，ただ草稿のなかに挟み込んだというだけのことであった。そのさい，「混乱」の表題をもつ，とりあえず「a」から「j」までの記号だけがつけられていたページのそれぞれには，さらに 352 という数字がつけ加えられた。おそらくこの段階で，材料集録のもう一つの部分にも，360 から 392 までのページ番号がつけられたのにちがいない。

第 5 章とは違って，地代についての諸研究は，第 6 章の執筆以前に時間を隔てて行なわれていただけでなく，それらの成果はまた自立した形態をも受け取っていたのであって，1865−1866 年に——主として 1865 年 11 月−12 月に——成立した，370 ページの大きさの 1 冊の抜萃ノートのなかに結晶していた。それは，約 24 ページにわたって，恐慌に関する上述の議会報告書からの抜萃を含んでいる（ただし，これらの抜萃からは，第 5 章に取り入れられたものは一つもなかった）。ノートの主要部分は地代に当てられている。この理論的問題の仕事について，マルクスは 1866 年 2 月 13 日付の手紙でエンゲルスに次のように伝えている〔MEW, Bd.31, S. 178〕。「ぼくは昼間は博物館に行き，夜に書いた。ドイツにおける新しい農芸化学，とくにリービヒやシェーンバインは，この問題に関してはすべての経済学者をひっくるめてもそれ以上に重要だし，他方では，ぼくが近ごろこの論点を取り扱いはじめてからこのかた，フランス人たちによってこれについて提供された大量の材料があって，これらのものが読破されなければならなかった。ぼくは地代に関するぼくの理論的研究を 2 年前に終えた。そして，ちょうどこの間に多くのことが，しかもまったくぼくの理論を確証しつつ，成し遂げられたのだ。」じっさい，すべての抜萃のおよ

そ三分の一はユストゥス・フォン・リービヒの諸著作からのものである。さらにマルクスは，とりわけイポリト-フィリベール・パッシー，パトリク・エドワド・ダヴ，ジェイムズ・フィンリ・ウィア・ジョンストン，L・ムニエ，レオンス・ド・ラヴェルニュの著作を抜萃した。リービヒ，ジョンストン，ダヴの抜萃に書き込まれた鉛筆の線は，マルクスがこのノートにもう一度目を通したことをも証明している。しかし第6章では，脚注のなかで挙げられた該当箇所は，その大部分が，それとなく示されているだけである。しばしば，引用されるべき著者の名前だけが書き留められ，ときおりマルクスは脚注番号を書くだけで満足した。仕上げられた脚注はきわめてわずかであって，しかもそれらは，文献を参照する必要がない脚注か，または，必要な出典がマルクスの蔵書のなかにあった脚注であった。その例を挙げれば，モリス・リュビションの著作がそうであり，また，マルクスがヴィルヘルム・ヴォルフの遺品のなかから受け取った若干の書物，たとえば，テーオドール・モムゼンやヴィルヘルム・キーセルバハの著作がそうである（1864年11月18日付のエンゲルスあてのマルクスの手紙〔MEW, Bd.31, S.25−27〕を見よ）。このような仕上げの点での不備は，マルクスがこの章を，短期間に極度の緊張のもとで，まださきに印刷のための仕上げの機会があるものとよく承知したうえで執筆した，ということで説明がつく。第6章の改作を行なったならば，マルクスはきっと，絶対地代と差額地代とに関する諸節を置き換えたであろうし，また細目にわたる篇別構成（〔本分冊，〕816−817ページを見よ）をも実現したことであろう。とりわけまた，脚注の広範囲にわたる仕上げのために，地代に関する体系的な説明を，いま触れた抜萃ノートやまた若干の「サブノート」でも集められていた材料と結びつけることになったであろう。のちに成立した，「第3部に属するもの」の一部として残されている草稿「差額地代」（MEGA②第2部第4巻第3分冊〔未刊〕を見よ）は，補足的な学説史的かつ経験的な材料を含むものであるが，この草稿もまた，そうしたことを示唆している。

草稿のそのほかの手入れについて

この草稿には，エンゲルスが赤鉛筆で書いた「Ⅰ」というしるしがあるが，これは，伝存している第3部用の他の草稿（MEGA②第2部第15巻〔未刊〕を見よ）にも彼が「Ⅱ」，「Ⅲ」，「Ⅳ」と番号をつけたのと同様である。こうすることでエンゲルスはマルクスにならったのであって，マルクスは，第2部について事後的にこのような処理を行なっていたのであり，またそのようにして，印刷用原稿の直接の準備をすすめるなかで自分でさまざまの材料を整理していたのである（フリードリヒ・エンゲルス「序文」。カール・マルクス『資本論』第2巻，フリードリヒ・エンゲルス編，ハンブルク，1885年，Ⅳ－Ⅴページ〔MEW，Bd.25，S.10-11ページ〕を見よ。また，MEGA②第2部第4巻第1分冊，564ページ〔第2部第1稿の「成立と来歴」中の「「第1稿」のマルクスによるその後の利用」〕をも見よ）。第3部の草案には，そのほかにも，あとから書き込まれたもろもろの記号がある。たとえば，本文と脚注とは赤鉛筆による水平の線で区切られており，それに加えて，脚注は，本文のなかでもページの下の部分でも，同じく赤鉛筆で，しるしがつけられている。意図された本文の置き換えは，赤鉛筆による線や十字によって，ときには連結線によってしるしがつけられている。最後に，赤鉛筆ないし鉛筆による個々的な訂正があり，とりわけ，さまざまな本文中の章句に赤鉛筆による括弧がつけられているが，それらは1894年の刊本には取り入れられなかった。また，費用価格に関する論述については，マルクスがのちに試みたいくつかの改作〔『資本論』第3部の第2-4稿〕があるが，これらの論述には赤鉛筆で書かれた済み記号があることも一つの事実である。ところで283ページには，左側に赤鉛筆によるエンゲルスの筆跡で「4）に移すこと」と書かれており，その右側には同じく彼によって，しかしこちらは鉛筆で「注，次ページ」と書かれている（〔本分冊，〕407ページ36行への異文）。若干のページには，エンゲルスがあとから鉛筆で書き込んだことが明白な，そのほかの覚え書きと付随的な計算とがある。511ページでは，エンゲルスは

本文の1箇所について，改訂用の文章を書いた（〔本分冊,〕807ページ1−7行への異文）。

だから，ある種の手入れないし記号付けがエンゲルスによって行なわれたものであること，また印刷用原稿の準備中に付け加えられたものであることの公算は非常に大きい。しかし，若干のものがマルクスの手によるものであることを排除できない。というのも，マルクスは1868年4月にこの草稿に目を通したのだからである（1868年4月22日付のエンゲルスあてのマルクスの手紙〔MEW, Bd.32, S.65−67〕，1868年4月30日付のエンゲルスあてのマルクスの手紙〔MEW, Bd.32, S.70−75〕を見よ）。そのさい，主著のもっと以前の諸草案〔すなわち『経済学批判要綱』および『1861−1863年草稿』〕にも特有のもろもろの記号づけが行なわれないですまなかったのは，まずまちがいのないところであろう。草稿のなかに書き加えられたすべての手入れや覚えは，異文目録や訂正目録に記載されるか，あるいは本文のなかで再現されている。

典拠文書についての記録

自筆での書き下ろし。原手稿——社会史国際研究所，マルクス・エンゲルス遺稿，整理番号，〔新目録〕A80/〔旧目録〕A54。

書録素材　種々の紙種の全紙，大部分は4ページからなり，ばらで重ねられており，綴じられていない。一部は，紙の表紙のなかに挟み込まれている。

次の紙種が使用された。

1	−	116	の諸ページに	第1紙種
117	−	150	の諸ページに	第2紙種
151	−	202	の諸ページに	第3紙種
202a	−	242	の諸ページに	第4紙種
243	−	417	の諸ページに	第5紙種
417a	−	429	の諸ページに	第6紙種

430	− 445	の諸ページに	第 7 紙種
446	− 449	の諸ページに	第 8 紙種
450	− 457	の諸ページに	第 7 紙種
458	− 461	の諸ページに	第 9 紙種
462	− 469	の諸ページに	第 7 紙種
470	− 528	の諸ページに	第10紙種
528	− 531	の諸ページに	第 9 紙種
[531a]−[531b]		の諸ページに	第11紙種
532	− 539	の諸ページに	第 7 紙種
540	− 543	の諸ページに	第12紙種
544	− 551	の諸ページに	第 7 紙種
552	− 575	の諸ページに	第13紙種
一つの表紙に		の諸ページに	第14紙種
一つの表紙に		の諸ページに	第15紙種

第 1 紙種：白色，現在は淡灰色，無罫，透かし無し。全紙のサイズは 404 × 317mm であり，202 × 317mm に折られている。

第 2 紙種：濃青色，光沢あり，かなり厚い，罫あり。罫は 8.8mm 間隔の青い線。これらの線は内側でとくにはっきりしているのにたいして，外側では，透かしを通して線がうっすらと現われているだけである。透かし：E TOWGOOD とブリタニアのシンボルマークがある。そのほかに，1863 約 26mm 間隔で垂直の線が引かれている。全紙のサイズは 411 × 326mm であり，205 × 326mm に折られている。

第 3 紙種：濃青色，光沢あり，かなり厚い，罫あり。罫は 8.8mm 間隔の青い線。透かし：E TOWGOOD およびブリタニアのシンボルマークがある。そのほかに，1864 約 26mm 間隔の垂直線がある。全紙のサイズは 404−407 × 321−324mm であり，202−204 × 321−324mm に折られている。

第 4 紙種：濃青色，光沢あり，第 2 紙種および第 3 紙種よりもやや薄

い，無罫。透かし：S THOMAS 1864 そのほかに，25.5mm の間隔の垂直線がある。全紙のサイズは 404 × 322mm であり，202 × 322mm に折られている。

第5紙種：淡灰色，青みを帯びている。比較的光沢があり薄い（第1紙種よりも薄い），無罫，透かしなし。全紙のサイズは 433 × 339−344mm であり，214−217 × 339−344mm に折られている。

第6紙種：濃青色，光沢あり，かなり厚い，無罫。透かし：E TOWGOOD 1864 およびブリタニアのシンボルマークがある。そのほかに，27.5mm 間隔の垂直線がある。全紙のサイズは 404 × 322−323mm であり，202 × 322−323mm に折られている。

第7紙種：白色，光沢あり，罫あり。罫は 8.7mm 間隔の淡青色の線。透かし：Joynsons Improved Extra 1862 および標章（紋章？），そのほかに，25mm 間隔の垂直線がある。全紙のサイズは 396−399 × 328−329mm であり，198−199 × 328−329mm に折られている。

第8紙種：白色，罫あり。罫は 8.75mm 間隔の灰色の線。透かし：J WHATMAN 1862 およびブリタニアのシンボルマーク，そのほかに，26mm 間隔の垂直線がある。全紙のサイズは 400 × 330mm であり，200 × 330 mm に折られている。

第9紙種：白色，かなり厚い，罫あり。罫は約 8.7mm 間隔の灰色の線。透かし：PIRJE 1863 ならびにブリタニアのシンボルマーク，そのほかに，約 26mm 間隔の垂直線がある。全紙のサイズは 400 × 328−329mm であり，200 × 328−329mm に折られている。

第10紙種：白色，光沢あり，かなり厚い，無罫。透かし：約 27.6mm 間隔の垂直線のみ。全紙のサイズは 408 × 326mm であり，203−204 × 324−326mm に折られている。

第11紙種：（かつては）白色，第10紙種ほどの光沢はなく，罫あり。罫は約 9mm 間隔の灰色の線。透かし：約 26mm 間隔の垂直線のみ。全紙

のサイズは 400 × 328mm であり，200 × 328mm に折られている。

第12紙種：白色，光沢あり，かなり厚い，罫あり。罫は 9mm 間隔の淡青色の線。透かし：26.5mm の間隔の垂直線のみ。全紙のサイズは 396 × 328mm であり，198 × 328mm に折られている。

第13紙種：黄ばんでいる（かつては白色？），かなり厚い，光沢あり，無罫。透かし：約 26mm 間隔の垂直線のみ。全紙のサイズは 409 × 326mm であり，204 × 326mm に折られている。

第14紙種：白色（黄ばんでいる），光沢あり，かなり厚い，無罫。透かし：E TOWGOOD FINE およびブリタニアのシンボルマーク，そのほかに，26mm 間隔の垂直線がある。表紙として使われているこの全紙の全体は，もともとは 449 × 334mm であった。表の紙葉と裏の紙葉とは折れ目のところで引き裂かれている。折り目のところには，けばけばがあるだけである。表題紙の紙も右ページと下部とで折り取れているので，その最大の幅はいまでは 209mm，最大の長さは 329mm である。裏表紙の紙葉は 116 ページのあとにある。

第15紙種：濃青色，無罫。透かし：約 26mm 間隔の垂直線のみ。この表紙のうち，表の紙葉だけがあるが，折れ目での紙の損傷が著しい。残っている最大の幅は 200mm，長さは 334mm。

状態　全紙は一般に良好に維持されている。用紙は黄ばんでおり，とくに，たとえば各章の最初のページのように，かなりのあいだいちばん上に置かれていた全紙はそうである。たとえば，528–531 ページの全紙全体が，同じ用紙からなる 458–461 ページの全紙よりもきわめてひどく黄ばんでいる。各章の表題ページでは，縁は折れ曲がり，部分的には折り取れている。417b ページでも，紙が折り取れることによって，本文がわずかに失われている。どの表紙もきわめてひどく損われている。

筆者　マルクス。

筆記用具　黒インク，個々的な訂正は鉛筆でも行なわれた。マルクスとエンゲルスは，草稿の目通しのときには，仕事におもに赤鉛筆を使い，若

干の場合にはまた鉛筆をも使っている。

書法　この草稿は，きわめてぞんざいで小さな筆跡で（ドイツ書体で，外国語の語はラテン書体で）書かれているので，読みにくい。多くの語が略記されるか短縮されている（字母の，大部分は母音の省略，複数の字母の融合）。定冠詞および関係代名詞の der，die，das は，すべての格および性において，大部分が d. と略記されている。所有代名詞 sein は，しばしば，すべての格および性において，s. と略記されている。前置詞 für，mit，von，vom は，しばしば，f.，m.，v. となっている。重子音 mm，nn は，当時行なわれていた書法に従って m̄，n̄ とされている。ときおりマルクスは，語のかわりに数学記号を使っている。記号×（乗算記号）は，「掛ける」または「回」，記号＝は「に等しい」，＞は「よりも多い，大きい」，＜は「よりも少ない，小さい」，＋は「プラス」，－は「マイナス」，±は「多かれ少なかれ」，をそれぞれ意味している。執筆の最中にマルクスは多数の変更を行なったのであり，多くの語や文成分が抹消された。しばしばマルクスは，行の上にさまざまの付け加えを書き込んだのであって，それらはときおり欄外で続けられている。一連の書き加えをマルクスはあとになってから草稿に書き込み，それらを，対応する覚えや整序記号によって本文のある特定の箇所に組み込んだ。

マルクスは七つの章のそれぞれを，新しい全紙に書き始めた。その結果，若干のページ，たとえば 405 ページ，ならびに，第 6 章の最後の 2 ページ――このうちの最終ページにはページ番号もつけられなかった――は，空白のままである。また，118，139，140，150，265，266 ページにも，なにも書かれていない。

マルクスは，それぞれのページの上半部を書き続けられている本文に使い，下半部を脚注用に空けておくために，書き始める以前に全紙をもう一度折って折り目をつけた。彼はこの区分を，たいていは守っているのであって，ときおり彼は，ページの下半部が空白だったにもかかわらず，折り目を越えないようにしようとして，ひどくつめ込んで書いた。マルクス

は，脚注のための場所をそれほど多くは必要としないと感じた若干の場合には，本文のためにページの三分の二ないし五分の四を使い，三分の一または五分の一を脚注のために使えるように，折り目をつけた。たとえば彼は，179−182 ページを含む全紙には，まず真ん中のところで折り目をつけ，それからもう一度，3：1 の割合で折り目をつけた。

9−30 ページでは，マルクスは，これらのページの下半部だけを使って，脚注「d′)」のテキストを書いた。若干の場合には（たとえば 133−136，155−157，163−170 ページ），彼は折り目を越えて書いた。若干の全紙（たとえば 137−154 ページ）では，彼は真ん中で折り目をつけることをしなかったし，同様に，あとから付け加えられた 352a−352j ページでもそうしなかった。152 ページにある，「［補遺］中位的な構成の諸商品の生産価格」には，組み込みのためのなんの覚えもつけられないままに残された。100−154 ページは，マルクスは通して書いたのではなかった（〔本分冊，〕152 ページ 20 行−196 ページ 36 行および 38−41 行への異文を見よ）。

マルクスは本文部分のなかの脚注のつく箇所にしるしをつけたが，他方，下半部で彼はしばしば，数字しか書かなかったり，引用されるはずの著者のイニシアルや名前しか書かなかった。書くつもりであった脚注のあいだにはマルクスは余白をあけておいた。脚注を仕上げるときに余白が十分でない場合には，マルクスはときおり，ページの上半部にも脚注のテキストを続けて書いている。とくに，新たな注を付け加えたり，脚注にさらに脚注をつけたりしたときにはそうであった（〔本分冊，〕470 ページおよび 472 ページを見よ）。

283 ページでは，マルクスは新聞の切り抜きを一つ貼りつけた。

ページ番号の一部は，だれかの手によって鉛筆でなぞられた。ページ番号のまえには，そのつど NM という文字が，表紙の場合には NL または NO の文字が書き込まれた。すべての全紙に IISG〔社会史国際研究所〕のスタンプが押されている。

ページづけ　マルクスは草稿に，インクで，それぞれのページの外側の

上部の隅に，1–528という通し番号をつけた。そのさい彼は，おそらくは先行するページ番号を正しく読まなかったことから，若干ののまちがいをした。たとえば，63ページのあとに66ページが続き，86ページのあとに89ページが，137ページのあとに139ページが，140ページのあとに150ページが，385ページのあとに390ページが，478ページのあとに480ページが，それぞれ続いている。340ページの裏のページをマルクスはページづけをしないままに残したが，そのページにはだれかの手で［340a］という記号が書き込まれた。513ページのあと，マルクスはその裏のページにも513というページ番号をつけた（編集済みテキストでは，513［a］としてわかるようにしてある）。

第2章の全紙には，それぞれの左上隅に，鉛筆でa）からl）までの記号が書き込まれた。a）= 155ページ，b）= 159ページ，c）= 163ページ，d）= 167ページ，e）= 171ページ，f）= 175ページ，g）= 179ページ，h）= 183ページ，同じくh）= 187ページ，i）= 191ページ，k）= 195ページ，l）= 199ページ。

マルクスは若干のページづけを変更した。たとえば彼は，283ページのあとで，それに続く諸ページに，283a，283b，283cというページ番号をつけた。そのあとで彼は，283bページを284ページに，283cページを285ページに変更した。彼は，389ページを393ページに変更し，それに続く諸ページも同様に変更した。これらの変更のすべてが，いまも確認できるかぎりは，異文目録のなかで明らかにされている。

マルクスは，あとから草稿のなかに若干の全紙を挿入した。たとえば，彼が最初のページに202aというページ番号をつけた全紙がそうであって，次のページにはだれかの手で，鉛筆で［202b］というページ番号がつけられたが，この全紙の続く2ページはなにも書かれないままに残され，ページづけもなされなかった。325aと325b，352a–352j，417aと417bの諸ページも挿入されたページである。325a–325bページがある紙葉と352a–352bページがある紙葉とは，もともとは一枚の全紙だった。

〔4ページある〕完全な全紙ではなく，表のページと裏のページしかない紙葉となっているのは，このほか，417a−417b，470−471，472−473，495−496，497−498，522−523，524−525，531a−531bの諸ページである。

第7章は，マルクスが自分でページづけをすることはなかった。エンゲルスは，2ページごとに，ただし528ページは鉛筆で，［534］ページと［538］ページとを除く，それに続く574ページまでのすべてのページはインクで，ページづけをした。［534］ページおよび［538］ページと上記以外のすべてのページとでは，ページづけはだれかの手によってなされた。マルクスによって第6章から移された470−471ページにも，だれかの手で［531a］および［531b］の記号が付けられた。

（1994年8月25日）